
Hello,New World!

城崎 來人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Hello, New World!

【Nコード】

N1210W

【作者名】

城崎 來人

【あらすじ】

神風聖。職業・便利屋。

頼まれればなんであろうと引き受ける（ただし悪行は除く）男の下に未来の「娘」が現れる。そしてその娘から宣告された「死」、それを避けるためにこの時代に来た娘「たち」。

果たして男・聖はどう生きるのか？

人物紹介（前書き）

ある程度話が進んだので人物紹介。
今後も話の進み具合に応じて変更していきます。お楽しみに。

人物紹介

・神凧 聖

職業・便利屋。今年で二十の十九歳。

感情の起伏が乏しいが、常に厚い。善事のためなら己を犠牲に出る。家族に対する願望は人並以上。突如現れた未来の娘に対しても十分に対応できる等と意外と柔軟性に富んでいる。

身体能力は現時点では未知数であるが優れている。極度の機械音痴。

特徴は完全白髪と高身長。

・穂波・白雪（現在確認できる範囲）

未来からきた聖の娘。聖の『便利屋』を辞めさせるためという理由で来ている様子。

未だ不明な点は多く、一つの体に複数の人格が宿っている状態。

その理由は今後明らかに？

・大嶋 稲穂

職業・高校生。現在は光陵高校の二年生。

非常に明るいい性格で、天真爛漫という言葉が当てはまる。

幼少期に父親を亡くしているが、そんな気配を微塵も感じさせない。現在は学業の傍らで実家のパン屋を手伝っている。

・氷城 雪華

職業・大学生。今年で入学の新生。

落ち着いた雰囲気や常纏に纏っており、よく年齢を間違えられる。

実家の氷城剣術道場の師範代で、実力はかなりのもの。道場から抜け出す父親に頭を悩ませている。

聖とは兄（姉？）弟子の關係に当たる。

・島津 義孝

職業・大学生。第二学年。

明朗快活なうえに豪放磊落。細かい事は気にしないタイプであるが、その性格の所為で時々聖が迷惑を掛けられる。聖の親友。

大学の剣術部期待のルーキーであり、勉学に置いてもかなり優秀。実家のことは自分からあまり話そうとしない。振っても他の話に変える。

人物紹介（後書き）

現時点での判明点。今後の展開に応じて順次公開予定です。

Introduction

特に大した目的も無く、涼しい春風の舞う公園の道を、俺はただ静かに歩いていった。

三月中旬。時期的には多くの学生達が変わる環境に不安と期待を入り混じりにしながら四月のスタートを待ちわびている。

本来なら俺もその内の一人に入るはずであるうが、残念ながら今の俺はその様な期待を一切持っていなかった。

「ねえねえ、パパとママはあしたのぼくの入学式に来てくれるんだよね？」

前方から来る子連れ親子が、仲睦まじそうに手を繋いで歩いている。母と父に挟まれ幸せそうに手を握り、背には新品のランドセルが陽光によつて輝いていた。

「当然だ。タクんの入学式だから、パパはお仕事を休んでも行くぞ。カメラにもばつちり取っておくぞ！」

「パパったら、『タクんと並んで写真を撮ってもらうんだ！』なんて言ってお母さんにカメラの使い方を一生懸命教えていたからね。お母さんも頑張るよ。」

その言葉に、真ん中の少年は頬を膨らませる。

「？ タくん、どうかしたのかい？」

「…パパもママも一緒がいい！」

…そんな会話をしているうちに幸せそうな三人とすれ違い、しばらくの間黙々と歩き続けた。

公園の出口に差し掛かったところで振り返ると、先ほどの親子の背中には既に見えなくなっており、ただ一人だけこの世界に残されたような静けさに襲われた。

「…家族か…うらやましいな…」

ポツリと口から零れた言葉は、何よりも俺、かみなきひじり神凧聖の心を表していた。

「俺が考えるに、聖は客に対して扱いがなっていないと思うんだ。茶は出ないのか？」

「居直り野郎に出す茶なんぞ無い。水で我慢しろ」

自宅である浅海^{あさみぞう}の六畳一間に帰ると、当然と言わんばかりに友人・島津義孝^{しまづよしたか}が座布団の上で俺愛読の小説を読んでいた。鍵を閉めていたはずではあるが、帰って来ると小窓は見事に粉碎されていた。既にこれ位では驚かなくなってしまう自分は問題だろうか。飛び散ったガラスの破片をとりあえず一箇所にまとめておく。

「相変わらず連絡、前触れなしに来るのは勘弁してくれ。その度に窓を壊されたんじゃないぞ」

「細かい奴だな、弁償はしているから大丈夫だろ？」

「用意するのも壊すのもお前だろうが：ほら、水だ」

冷蔵庫の中に入っていた、いつ入れたか分からないペットボトルの封を開け、二つ置いてあるコップの内一つに注いで義孝に渡す。義孝は遠慮なくその液体を一気に飲み干した。

「か〜〜！ 良く冷えてる！」

「そうか、用事が終わったらとつと帰れ。こんなところで油売っているほど暇じゃないだろ？ 剣術部の合宿やらはどうした？」

島津義孝。ここ泉州市にある明応大学に通う第二学年で、剣術部期待のルーキーだ。

今時珍しい総髪に釣り上がった鋭い目が特徴的で、一見恐ろしく見えるが話せばその豪放磊落^{ごうほうらいらく}さが良く分かり、誰にでも好かれるタイプである。

義孝は一気に飲みした水の入ったコップを荒々しく畳において、読んでいた小説も部屋の隅に投げ片付けた。ものの見事に小説を入れている箱に収まったが、見ていてあまり感心できるものではなかった。

…人の物なのだから大切に扱って欲しい。

「すっぽかした」

「……」

「そんな怖い顔するな、冗談だつて。昨日終わったから久々にこっちに顔を出そうと思っただけだつて」

「冗談でもそういうことはやめてくれ」

「了解了解。そうだ、土産を持ってきたんだつた…ほら」

僅かに反省の色を見せた後、義孝は部屋の間（勝手に）置いていたバツクから『おたべ』と描かれた京都名物を差し出してきた。

「…お約束というべきか、これは？」

「でも好きだろ？ それとも生の方は駄目だったか？」

「いや、俺は断然生派だな。ありがたく受け取つて…」

そういつて受け取るうとしたところ、義孝は土産を後ろに隠した。さすがは剣術者、振り戻しが速い。

「…やっぱり、何かあるとは思っていたが…依頼か？」

「話が早くて助かる、実はいくつかあつてな」

依頼。

この義孝は何か困つた事があつたときは、大抵俺の部屋に来て相談をしてくる。場合によっては何か協力をしなければいけない事もあるので、このように何か報酬を持つてくることがある。

「明応大学の学園祭が七月にあることは知つているよな？」

「去年招待されたやつだな、剣術部は演舞と決まり組手だったか？」

学園祭の名前は水仙祭すいせんといい、他の町からもこれを見るために訪れる人がいるほど有名だ。その来場客の多さには非常に驚かされた。

「実は今年の出し物で、他流派も招いた演舞を試してみよう、ということが挙がつたんだ。伝手も何も無いのに会長が既に実行委員会に提出しちまつて…挙句にそれが通つちまつたんで…」

義孝の言う会長とは一度話したことがある。『思い立ったが吉日』といわんばかりの即決即断の潔い人のだが、如何せん無計画に行動するものだからその尻拭いを後輩達がするのが日常茶飯事になっているらしい。

今回はその被害が拡大し、無関係であるはずの俺までも巻き込ん

だ形になった、というわけだろう。

「…大体予想は出来たが続けてくれ」

「お前も知つての通り、このあたりの剣術道場は見世物にされることを嫌う人が多いから、俺らみたいのが頼み込んでも効果はほとんど無いんだ。そこでお前の手を借りたい」

「俺が代わりに頼んでくる…と？」

「正解」

義孝は頷いた。

予想は出来ていたが、いざ当たってみても素直に喜べない自分がいた。

「聖は道場の師範とかなり親しいから、行けると思うんだ。頼めるか？」

義孝の言うとおり、俺は活動の関係上地元の人との交流が深い。

余程突飛なことではなければ大抵は首を縦に振ってくれるのも、長年の交流の産物だろう。

「道場によりけりだな。希望はあるのか？」

「特に無い。というより、聖の知り合いならば俺はOKだ」

全権を委ねられた。正直ここまで任されてしまつと逆に困る。

少し考えると一つの道場名が直ぐに浮かんだ。

「…直ぐに思いつくのは氷城剣術道場だが…そこなら多分お前でも頼み込めば行けると思うのだが…」

「そこだったらやっぱり聖のほうが適任だろう？ 羅刹師範はお前

がお気に入りの方だからな」

「…それで良いのか？」

「ん？ それって？」

「いや、義孝側も何らかの希望はあるだろう。それを考慮しなくて良いのか、ということだ」

「さつきも言った通り、俺は聖に任せるよ。人を見る目はお前のほうが遥かに優れているからな」

どうやら本当に全て俺に任せるようだ。それなら期待に添えられ

るように可能な限り善処する事にしよう。

「…他には？ これで終わりではないだろ？」

「あとはこの宣伝ポスターを人目の付く場所に張って欲しいって事だけだな。十五枚と今回は多いほうだ」

義孝が出したのは丸められたポスターだった。開くとカラーで艶のある紙に、『明応祭開催』と大きく書かれ、芸術系サークルの作品らしきものが書かれていた。

「…随分力が入っているな。しかし、なんでお前が実行委員みたいなことをしているんだ？」

「人数不足だからな。去年の学園祭があまりにも良すぎたから新生のほとんどが及び腰になっているみたいだな」

「…否定できないな」

先ほど言ったように去年は義孝に誘われて水仙祭に参加したが、その規模・熱気はあまりにも異様だった。

来場者数およそ二〇万人。二日間での人数なので多いほうだろう。今年の日程を見てみればさすがに去年のことを考慮したのか三日間の予定になっていた。

義孝の招待と言うことである程度優先されたので比較的スムーズに水仙祭を楽しむことは出来たが、そうでなければ一つの店を回るのに一時間というほどの状態だったそうだ。

確かに昨年のお水仙祭を見た新入生はそれを切掛けに明応大学の入試を決心した者も少なくはないだろうが、それを見たが為に怖気付いてしまっている者も多い、ということらしい。

義孝の現状を聞いて黙っているほど薄情な性格はしていないので、答えはひとつだった。

「了解。両方とも引き受けた」

「助かる。それじゃあこれは前報酬で…こっちは俺個人からの土産だ。美味かったぞ」

そう言っただけの目に置かれたのは、奈良漬・鯖^{さば}寿司・茶葉だった。当然と言わんばかりに俺の分と義孝の分と二つ置かれた。

「…生ものを土産にするな。春とはいえ、痛んだらどうするんだ」
「今日買った物だしクーラーボックスに入れていたから大丈夫だろう。昼飯も多分まだだろうから丁度いいと思ってな」

何だかんだ言って義孝は非常に気の利く性格なので、頭が上がりなかつたりする。感謝しようとしても「やりたいことをやっているだけだから気にするな」といつて全て断っている。

「ああ、あとこの先なんだかんだで聖のほうに顔を出せない時間が増えるだろうから、一応この携帯電話を渡しておく」

義孝は鞆の中から青い折り畳み式の携帯電話を取り出して、俺に手渡した。新品なのか、一切傷が無く、一瞬触るのを躊躇ってしまった。

「…俺が機械音痴なのは知っているだろう？」

「だからと言って避け続ける理由にはさせねーぞ。これを機に携帯ぐらい使えるようにするのも悪くないだろ？ 連絡手段が手紙だけって言うのも今時珍しいがな」

義孝の言うとおり、この部屋にはパソコンどころか電話すら無い。電気製品は照明と冷蔵庫くらいだ。携帯電話も手続きが面倒だと感じたので持っていない。

今まで連絡は義孝の言うとおり手紙だけで済ましてきたが、今後は迅速な連絡のやり取りが必要だから持て、との事だった。

操作説明書と書かれた本を畳に置いた。非常に分厚い為、読む気が一瞬で削ぎ落とされた。

「一応お前に関係のありそうな番号はもう登録してあるからな。俺と相楽さんに稲穂つてところだな。操作は昼飯でも食いながらするとするか」

「…番号を覚えなくて良いのか？ 最近の携帯は進歩しているんだな…」

「何処まで機械音痴なんだよ…何年も前からそんな機能は備えられているっつーの」

「形が変わったのは知っているが、中身が何処まで進歩しているか

は全く分からなかったからな」

「もう少し時代の流れに乗ったほうが良いぞ…」

「メールの文字数は二十文字くらいだったか？」

「ポケベルと一緒にするな！ お前はいつの時代生まれだ！」

昼飯代わりに渡された土産を食べながらそんな下らない話をし、携帯電話の操作の説明を受けていた。

昼食後、義孝は大学の方へと戻り作業を再開するということ帰っていった。

その姿を見送った後、俺は義孝に頼まれた事を行う為に白水商店しみず街に行くことにした。

Daily Life

せんじょうしゅう しろしみず
泉州市白水町。人口およそ八万人。土地面積に対する人口密度は過疎地でもなく密集地でもないという日本では極めて珍しい地域である。

特に有名な特産品等が無ければ観光地としても秀でている場所も無いが、訪れた人は口を揃えて「もう一度行ってみたい」と言う。なぜその様に言われるかというと、地域住民の優しさに理由があったりする。

その最たる場所がこの白水商店街であり、シャッター街という言葉とは縁遠い活気に溢れている。

ここは常に人の温かさで満ち溢れており、駅に直面している形なので観光客が第一に訪れる場所になる。地域の交流の深さは他の街の追隨を許さないほどであるので、見かけない顔は直ぐに分かってしまう。

そして観光に来た人達に対しての反応が「歓迎」なのだ。

心から、精一杯のおもてなしは、来た人全てを癒す。それがこの街に満ちている優しさだ。

「何で義孝君は聖君に何でもかんでも頼むのかな？」

昼飯を食べた後、商店街に向かい掲示板に最後のポスターを貼っている（当然許可は取っている）と、声をかけられた。首だけ回してみていると、予想通りの人物がそこにいた。

「稲穂か。なんでもかんでもと言う訳でもないし、暇を潰せるから俺にも丁度良いからな」

おおしま いなほ
大嶋稲穂。光陵高校二年生であり、実家のパン屋・オオシマベーカーリーを手伝う少女だ。父親を幼い頃に亡くし、母親の手伝いをし、店を切り盛りしている。肩まで伸ばした髪を一括りにしており、明るい印象が特徴である。既に店の制服は半袖にしており、健康的

な肌が覗いていた。

「ふくん…あ、そこ少し左に傾いているよ。もう少し上げたほうが良いかな？」

「こうか？」

「そうそう…あ、今度は上げ過ぎかな」

そうこうしてようやく一つ目のポスターを貼り終わる。アドバイスをしてくれた稲穂に礼を言う為に振り返ると、相変わらず天真爛漫な笑顔を浮かべる稲穂がいた。

「とりあえずまず一つ、お疲れ様。あと何枚貼るの？」

「十四枚だな。問題は貼る場所がまだ見つかっていないことなんだが…」

「それなら私からいくつか連絡しておくよ？ 市民体育館とか市役所とか公園の掲示板とか。でも義孝君は聖君に仕事を任せっぱなしで何をしてるんだろっかね？」

「そう言っつな、稲穂。あいつはなんだかんだで俺の協力もしてくれるからな。持ちっつ持たれっつ、といったところだろう」

「…聖君のほうがよく働いてると思うんだけど？」

「その分は食料の融通でトントンド。暇人だから時間だけは有り余っているから、何か頼まれる位が丁度良いな。俺にとっては食料の方が今一番の問題だが…」

「ふくん…変わらないね…あ、そうだ！」

そう言っつて稲穂は自分の店へと戻っつていった。

何かと思っつてしばらく待っつてっていると、店から稲穂が袋を抱えて出てきた。オオシマベーカーのロゴが書かれた大き目の袋であり、それでもかなり膨らんでいるのを見ると、何かが大量に入れられていると分かった。

「はい、これ！」

そういっつて稲穂は胸に抱えていた袋を俺に渡してきた。とても温かく、気をつけなければ火傷をしかねない熱さを感じた。

「…これは？」

「うちの店の新作。他の人の意見も聞きたいから、試食してくれる人を探してたんだ」

袋の中からは香ばしい香りが漂ってきた。昼飯は済ませてあるとは言っても、土産の量だけでは少し物足りなかったので、思わず腹の虫を鳴らしてしまった。

「…一つ食べてみても良いか？」

「どうぞ、自信作だから味わって食べてね」

許可が下りたのでここで食べることにする。袋を開けた途端に先ほどの何倍も濃厚な香りが鼻をくすぐった。中には五個ほどの出来立てパンが入っており、見ただけで食欲がそそられた。

その内の一つを掴んで、ちぎって食べる。

「…美味しい。今までのものよりも弾力性があるな。米粉でも混ぜたのか？」

「一口食べて改良点を看破しないでよ…まあ、正解。やっぱり日本人だから米はどうだろうって思ってたの」

「なるほど…食感が変わって面白いな。それに俺の好みの味だ」

話しながらも自然に手が動いており、いつの間にか拳一つ分の新作パンは手元から消えていた。その様子を見て、稲穂は小さくガツツポーズをしていた。

「ご馳走様。これなら皆に喜ばれるだろう」

「好評で何より！ それじゃあこれを明日から店頭に出してみるね」

「おお、頑張れ。だけど仕事に精を出しすぎて学生の本分を忘れるなよ」

「うわあ、それは言わないお約束だよ！ でも、いざとなったら聖兄に助けてもらうから！」

「とりあえずは自分の力だけでやれるところまでやっておけ。最終日になったら手を貸してやるから」

「約束だよー！」

満面の笑顔と共に稲穂は店の中へと戻っていった。

「…さて、俺ももう一仕事に取り掛かるとするか」
残り十四枚。これを貼り終えたあとは義孝のもう一つの依頼を遂行しにいくとしよう。

「頼もう」

商店街、市役所等でポスター貼りを終えたあと、俺は街外れの剣術道場にやってきた。目的は当然明応祭の剣術部演舞に参加してもらう為の交渉である。手には当然袋詰めのパンだ。そのため非常に間抜けな道場入りになってしまった。

氷城剣術道場は『白水の歴史と共に有り』といわれる。歴史は非常に長く、残された記述どおりならば百年ほどだといわれている。

現在、門下生は三十人ほど。入門時に心技体を試す試練があり、そこで認められた者しかここで剣を振るうことを許されない。今日もその試練で認められた人たちが木剣で己を磨いていた。

「ああ、こんにちは、聖さん。道場破りですか？」
区切りが良かったのか、この道場師範の愛娘・氷城雪華こおりしろ せつかが歓迎してくれた。

束ねられていた腰まで届きそうな艶やかな長髪が解ほどかれると雫と なった汗が陽光に輝いていた。

凜としていた表情を僅かに緩めて微笑むその姿は非常に美しく、 優しき戦乙女なんて柄にも無いことを思い浮かべてしまった。

「いや、この時代に道場破りは少ないだろう。少し様子見と用事があるから来ただけだ」

道場を見渡してみると組手に打ち込む人が十人ほどいるが、その中に目的の人はいなかった。

「…羅刹らせつ師匠は今いないのか？」

「父上なら何か用があるといっって出かけました。確か町内会の会合だとか…」

「…恐らく今はただの飲み会になっているだろうな。師匠の酌を断れる人は町内会にはいなかったな…」

「ええ、恐らく…父上のお酒好きにも困ったものです」

雪華は呆れたように（実際呆れているのだろうが）溜息をついたが、直ぐに先ほどのように凜とした態度でこちらに向き直った。

「父上への言付けなら私が受けておきます。夕方までには帰って来るでしょうから…というより帰らせますので」

「出来る限り穩便に頼む。この前羅刹師匠が『このままだと雪華に殺される！』とか言いながら俺の部屋に駆け込んだときは驚いたぞ…何をしたんだあの人は？」

真夜中に部屋の扉を容赦なく叩かれて起こされ、開けると同時に飛び込んできた師匠の姿は今でも覚えている。濃厚な酒の匂いはしたが、酔いは完全に醒めていた様で、はつきりとした滑舌で『助けてくれ！』や『雪華の怒りを治めてくれ！』と懇願してきたのも昨年の冬のことだがはつきりと覚えている。

「それに関してはやりすぎたと反省していますが、父上にも非があったので…」

どの様な内容だったのかは分からないが、雪華は少し恥ずかしそうに俯いたので深く追求しないことにする。さすがにこれ以上深く詮索すれば師匠の二の舞になりかねないと本能が警鐘を鳴らしていたので…

「まあ、今はそのことじゃなく…実はだな…」

雪華にここに来た理由を話した。

「なるほど、義孝君は相変わらず聖さん頼りですね…」

「いや、あいつの場合は本当に忙しいだろうからな。それに俺も好きでやっているだけだ」

「聖さんも相変わらず人が良いですね。いつかその人の良さを見つけこまれて痛い目を見ますよ？」

「一応善悪の判断は付くから大丈夫だ。心配してくれてありがとう」

「いえ、大した事ではないので」

そう言って雪華はそっぽを向いてしまったが、一つ咳払いをする
と再びこちらに向き直った。

「分かりました、父上に話しておきます。話が纏まったら父上を直接向かわせるので」

「…師匠の扱いが酷い気がするが…まあよろしく頼む」

「しかし、今年の入門生は今までより覇気が無いな…何かあったのか？」

「…実はそのことで一つ悩みがあるんです」

「なんだ？ 俺で手伝えることであれば協力するぞ」

「それではお願いしてもよろしいですか？」

「こちらを見てきた雪華はどこか躊躇いを持っていたが、それも直ぐに道場で剣を振るう門下生へと視線を移した。

相変わらずどこか覇気を感じられない練習風景にもどかしさを感じているようにも見えた。

「今年になって入ってきた門下生に、氷城剣術の組手を見せたいと思っているのですが…」

「そういえば毎年やっているんだっとな。確か三月の上旬あたりに見に来ているから覚えているが…今年はどうしたんだ？」

「時期的には既に組手を見せ終え、門下生全員が意気込み始めていてもおかしくないのだが、今年は新顔に限って意気込んでいる様子は見られない。

「父上が不在の状態が一ヶ月ほど、更には熟練者の方々は皆都合がつかないそうなので…」

「…なるほど、肝心の師範が居ない上に、雪華の相手になれる人がいないのか…」

「この道場に置いて、雪華は師範代…つまり道場教え手の中では一番手である。

普通の組手であれば余程の実力差が無い限り問題ではないが、今回のように見世物として行う場合は同等とまでは言わなくても、差が少しある程度の相手でなければいけないのだ。

「そこで、聖さんに一つお願いがあります」

再びこちらに向き直った雪華は、何かを決心したようだった。

「私の相手になってくれませんか？」
「俺でよければ」

決まってしまうえば行動は素早く。それが俺の決まりだ。

道場の隅に置かれていた防具を身に付け、軽く竹刀を振る。前垂には「ご丁寧に『神風』と白糸で縫いこまれていた。

振りに鈍りはあるが、完全に錆付いているわけではないのでおそらく問題は無いだろう。

「入門生に見せるとしたら決まり組手のほうが良いと思うが、どうする？」

「私もそちらの方が助かります。非常に申し訳ありませんが、順番もある程度決めていたので、それをお願いします。決め手はこちらで打つ、ということが良いですか？」

「当然だ。道場師範代が元門下生に負けるようではまずい。それに俺では雪華に勝てないからな」

そう、俺は二年前までこの道場で羅刹師範の下で師事していた。期間としては六年間。武術を習う期間としては短い方だろう。

本来ならば門下生は怪我等何らかの理由によって続けられない場合を除き、流派を抜け出すことは無いのだが、俺の場合はとある一件を切掛けに道場を辞めざるをえなかった。

正直に言えば後ろ髪を引かれる思いはあったが、お世話になった道場に迷惑をかけるわけにもいかず、破門するように師匠に願い出たのだった。

しかしその願い出は受け入れられず、事が収まるまでの間、道場の出入り禁止を言い渡されただけだった。

その後二年の間で問題は解決したようで、今ではこの様に時々顔を出し、軽く参加できる程度になった。

「今日の組手次第では聖さんには是非道場に戻ってきて欲しいのですが……」

雪華の表情は、どこか寂しそうなものであったが、今の俺の答え

は一つだった。

「冗談。二年のブランクが空いている上に、あんなことを起こしておいて今更戻れないだろう。それに、俺は今の生活の方が性に合っているみたいだからな」

剣を振るう生活も充実していたが、それでは誰かの力となれる時間が短くなってしまふ。その為、今の生活のように必要な時だけ手を貸すくらいが丁度良い。

「父上も私も気にしていませんが…」

「羅刹師匠も雪華も寛大すぎるからだな、それは。気持ちだけありがたく受け取っておく」

一通り型を確認し終えたところでその話を終えることにした。一旦木剣を降ろして雪華の元へ向かう。

「予定していた順番を見せてくれるか？」

「これです」

差し出されたB5サイズの紙を見れば、型名・技名合わせて二十五個が順番に書かれていた。

「よし、確認した。少し流しでやってみるから、十分後に始めるか」

「お願いします」

十分後。

門下生は全員壁際近くに座らされ、その中央には俺と雪華が向かい合う形で座っていた。

道場内の空気は張り詰めており、身じろぎした際の布擦れの音も響くほどの静けさだった。

この辺りはさすがの氷城剣術試錬を乗り越えた門下生達だといふべきだろうが、心身共に人並み以上に鍛えられている。待たされてからおおよそ五分は経つのだが、それでも私語一つ無いのは素晴らしいの一言に尽きる。

「これより氷城剣術道場、剣術組手を始めます」

沈黙していた道場に、凜とした雪華の声が響き渡る。それと同時にこの場にいる全員の背筋が更に伸びた。

「今回初めて組手を見る門下生の為に説明しますと、この組手入門直後に披露する恒例行事となっております。これを通じて、各々の剣の道を見つける助けとなれば幸いです」

「ですが、この組手は本来師範と師範代によって行われるものではありますが、今回は師範の都合及びそれに代わる熟練者の都合がつかないために、以前この剣術道場の門下生として師事していた神風聖殿にお相手していただくことになりました」

名前を挙げられ、指し示されたので頭を下げる。

しかし紹介と同時に道場は途端に騒がしくなった。と言っても話し始めたのは今回の入門生のみである。

「…以前って事は、今は駄目なんじゃないのか？」

「いくら都合がつかないからって、外部の人間にやらせるなんて…」
そんな言葉が飛び交っていた。

「静かに！」

しかし、雪華の一喝によって再び静寂が訪れた。

「…礼無きは武人に非ず、これ以上聖殿を貶す言があれば、破門を申し付けます」

静かである分、雪華の怒りは門下生全員に染み渡ったようで、葬式にも似たような雰囲気が始まった。

「…雪華殿…」

この状態はあまりよくないと判断したので、この場を穏便に収めようと思わず口を出してしまった。

「自分への言は気にしていません。それよりも、道場の方々に待たせるのも長くなつては申し訳ないので、始めましょう」

「…分かりました」

不承不承といった様子が漂っていたが、それも一瞬で消え、清々とした雰囲気に戻った。

「それでは…」

それを合図に互いに礼をし、組手が始まった。

「お疲れ様でした、聖さん」

疲れが出ていたのか、思わずウトウトとしていると背後から声を掛けられた。

決まり組手を見せ終えた後、雪華に『お礼をさせて欲しい』といわれて氷城家にお邪魔することになった。今は縁側に座っている。後ろから見れば間違いなく縁側で転寝している老人だ。

道場にいた門下生は全員、組手を見せ終えた後、各自練習をするように雪華が言っておいた。というのも、時間の空いた熟練者の人が訪れたので、代わりに監督をもらっているおかげである。

道場から去る際に、組手以前に覇気を感じられなかった新入門生はまるで人が変わったかのように意気込んでおり、今でも彼らの掛け声が氷城家にまで僅かであるが届いている。（道場と家の間は大分離れている）

「お疲れ：大分上達したな。時々技の対処が遅れたぞ」

「日々の鍛錬のおかげです。ですが、そういういつもも全てに対応しきった聖さんもお見事でしたよ」

「体力作りだけは怠っていないからな。それでも技は使わなければ鈍るということが良く理解できたよ」

「そうですか。どうぞお茶です」

そういつて差し出されたのは湯飲みに入ったお茶だった。湯気と共に漂う香りが少しだけ身体を癒した。俺や義孝より一つ年下ではあるが、この気配りは到底真似できない。さすがは剣術道場の娘と聞いたところだろうか。

「いただきます：としいたいが、これは師範のものじゃ…？」

渡された湯飲みは以前師範と茶を飲んでいたときに使っていた物で、少し飲むのを躊躇ってしまった。しかしそれを大して気にした様子も無く雪華は言った。

「大丈夫ですよ。最近父上はお酒ばかりなので湯飲み自体を使いま

せんから」

「それもどうかとは思いますが…まあいただく」

一口飲むと丁度良い温度の茶が口の中で香りを広げていった。

「…美味しい」

「ありがとうございます」

雪華は湯飲みを運んできたお盆を床に置き、俺の隣に座った。

「聖さん。今日は突然の頼み事でありながら引き受けてくれてありがとうございます」

「今まで世話になっていたお礼だ。気にしなくても大丈夫だ」

「それでもです。あがる時にも分かったと思いますが、おかげさまで入門生のモチベーションがかなり上がっていました」

「それはなによりだ」

すると、雪華が何かを言おうとしたので、言う前に茶を全て飲み干して立ち上がる。雪華が話し出しづらい内容といえば、道場に戻る、という事だろう、そう思って切り出せないようにした。この話だけはいつまで経っても平行線である為、話される前に切り上げるしかない。

「さて、今日やることも全て終わったから、帰るとしよう」

「あ…はい、分かりました」

そう言うとき雪華も立ち上がり、玄関先まで見送ってくれた。

「今日は本当にありがとうございます」

「気にするな。こっちも久しぶりに剣を振れて楽しかったからな」

「そう言っただけで助かります」

立ち上がって玄関の扉を開いたところでようやくまだやり終えていないことが一つあることに気がついた。

「ああ、言い忘れていたが…」

言おう言おうと思っていたが、予想外の頼み事などもあり言えなかった祝いの言葉を…

「明心大学、入学おめでとう。これから四年間、頑張れよ」

それだけ言つて、氷城家を出た。

「…ありがとうございます」

背を向けていたので見えなかったが、恐らくその時の雪華は微笑んでいたのだろう。優しい柔らかかな声が返された。

日は既に沈み始め、茜色の空の中、雪のように舞う桜の花びらが浅海壮へと向かっていた。

Hello, New Life!

依頼も終わり、銭湯にやってきた。浅海壮には残念ながら共同風呂すら存在しないので、毎日八・九時くらいにこの仙草せんそうの湯に来ることが俺の日課である。

脱衣所で用意が全て出来ると、人が少なくなりはじめた中へ入る。大半の利用客は大抵六時までには風呂から出ているので、広い湯船には俺が一人という場合が多い。今日も利用客が少なく、実質独占状態だった。

「ふ〜」

ある程度身体を流した後、浸かった湯船は丁度良い温度であり、疲れを取るには十分だった。

のぼせ防止の為に冷水で冷やした手拭いを額に乗せる。天井に顔を向ける形になるが、長風呂である自分にとっては必要なことなので、首が痛くなるのは我慢する。

商店街と氷城剣術道場は浅海壮を中心に対称にある。距離が近ければ特に問題は無いのだが、如何せん街の端と端にあり距離だけでもおおよそ十二キロはある。

一日でその距離を往復するのはさすがの俺でもきついものがあり、まさにこの湯は命の水だった（本来の用途は飲み水だったか？）。

湯船の中で今日あったことを振り返ってみる。

朝散歩から帰ってみれば義孝に仕事を頼まれ、昼は商店街・市役所・市民体育館等にポスターを貼った後、話すだけのつもりだった道場で組手。

「…結構密度の高い一日だったな…」

しかしそれもいつもの俺の日常に比べて、だ。これから新たな出会いのある義孝や稲穂、そして雪華に比べれば大した事はないだろう。

しばらく湯に浸かっていると、他の利用客は徐々に家路へと着き

始める。静かになり始め、思わず眠りかけたその時だった。

「おう聖！ お前こんな所にいたのか！」

浴室なので反響しすぎる大きな声が入り口から聞こえた。

声のしたほうに顔を向ければ、岩から作り上げたのか、といわんばかりの巨体、所々に大きな傷跡が目立ち、まさに猛者という言葉が当てはまりそうな風貌の男性がいた。

「…お久しぶりです、吹雪ふぶき小父さん」

そう、この人が氷城剣術道場の師範である、氷城羅刹その人である。

羅刹という名前は、氷城剣術道場における免許皆伝の証のようなもので、先代師範に認められた人がその名を受け継ぐことになっている。

道場内では常に「羅刹」と呼ばなければならないが、この様なプライベートな場所では本名で呼ばせてもらっている。

因みに「吹雪」の名前を知っているのは俺と雪華、そして義孝と非常に少ない。

「しばらく見ないうちに大きくなったか？ すこし立ち上がってみる」

「どこの大きさを調べるつもりですか」

相変わらず男の器(?)を計るとき、一物を基準にするのはやめて欲しい。

「男の価値は女を悦ばせられるかどうかだ。まあ、以前見た時で既に聖は合格してるがな」

「いつの間に…」

油断も隙も無い。気を緩めていたら全てを看破されてしまうかもしれない。

吹雪小父さんは一回だけかけ湯をすると、真っ直ぐに湯船へと身体を沈めに来た。小父さんは体が非常に大きい為、浴槽から大量のお湯があふれ出た。

「は〜…生き返る…」

「…お疲れ様でした」

「おう、聖も今日はうちの道場が世話になったみたいだな。ご苦労さん」

互いに顔を湯で流すと、ふと思いついたように話しかけられた。

「そついや、雪華から聖の伝言を聞いたが…あれ、なんて言っていたっけ？」

「水仙祭の演舞です」

「そつ、それだ。その話についてだがウチの演舞公開は問題ないぞ」「本当ですか？」

「その後には大学の剣術部と組手をするつてのが条件だがな」

「…こつちの利になる条件ですね」

「今日の組手を見た新参の奴らが急にやる気を出しやがってな。『

いつかあんな風になりたい』、『経験も必要だ』なんて言ってきたんだよ。若いのを萎^しませないためにも義孝に言つといてくれないか？」

「多分問題ないと思います。明日話してみます」

「宜しくな…しかし、今年は今までより意気込んでいたようだが、何か心当たりはあるか？」

小父さんは何かを分かっているようにニヤつきながら問いかけてきた。

「…全く」

「そつかそつか。分からねえなら良いんだ。それよりも当日は聖も見に来い。仲介人として最後まで見守ってくれ」

「分かりました」

それで小父さんとの会話は終わり、互いに風呂から出るまで話すことはなかった。

「それじゃあ聖、風邪ひくなよ」

「吹雪小父さんもお酒は程々にしてくださいね」

「おいおいおい、それじゃあ俺に何も残らねえじゃねえか」

「雪華が『父上が道場に顔を見せない』と怒っていましたよ」

言っではないがそれに近いことは話していたので問題ないだろう。

「げっ…さすがに道場を空けすぎたか…分かった、明日はきちんと指導しとく」

「お願いします。それでは」

「おう、お休み」

銭湯からあがり、羅刹小父さんと別れて浅海壮へと帰る。既に星明りと街灯のみが道路を照らす光となっていた。

湯上りである為か、吹きつける風が少し涼しく感じ、徐々に春が訪れることを否応にも実感させられる。

本来ならば新しい生活に胸を躍らせるのが、十九歳の感想であるうが、残念ながら俺の生活に恐らく変化はあまり訪れないだろう。

おそらくは便利屋として、誰かの幸せの為に動ければ、それだけで十分だ。

そんな事を考えているうちに浅海壮に着くという時だった。

「…ん？」

何ら変わらない道路の前、普段と異なる光景が一つだけあった。

「うゝん…ここで間違いないはずだけど…誰もいないのかな？」

浅海壮前唯一の街灯の下で右往左往する少女が見えた。

一瞬見えたかと思うと再び闇の中に消え、また光に照らし出される。そんな事を繰り返していた。

「…」

実を言えばこれは非常に珍しい光景だった。浅海壮に住んでいるのは実質大家である享楽さんと俺だけであり、ここを目的地とするのなら迷う人はほとんどいないのだ。

困っているのだろうか？ そう思うと声を掛けずにはいられなかった。

「道に迷ったのか？」

近づいて話しかけると相手はようやくこちらに気付いたようで、手元のメモから顔を上げる。

話しかけたタイミングが悪かったのか、俺は街灯の光に当たっていない為、相手からは俺の顔が見えていないようだ。その証拠に、少女は話しかけた俺に僅かながら警戒の色を強めた。

「…はい、実は神凧聖っていう人の住んでいる場所を探しているのですが…暗くて浅海壮という場所が見つからないのです」

先ほど迷っていた時とは微妙に異なる雰囲気を感じながら少女は答えた。違和感を覆えながらも俺は正直に答える。

「…神凧聖は俺で、ここが浅海壮だ。何か用事でもあるのか？」

「え！？ ちよ、ちよつと灯の下に来てください！」

腕を引かれて一歩踏み出すと互いに顔が見える状態になった。少女は俺の顔を見るなり、ようやく安心したような笑顔を浮かべた。

「…お父さん！」

そう叫ぶと感極まった表情と共に彼女は俺に飛びついてきた。

俺の生活は、俺を父と呼ぶ少女によって、一気に転換していったのだった。

From Future

「へ〜お父さんって独身時代はこんな場所に住んでいたんだね〜」
「……」

とりあえず俺を父親という風に呼んできた少女を部屋に上げることにした俺は、正直に言うところの混乱の極みだった。

それもしかたないだろう。男女の関係を持つている人なんか考えても思い当たる節はない。そして問題は俺と彼女の年齢だった。

彼女はまだ何も語っていないので憶測になるが、外見的には中学校もしくは高校に入りたて、というような年齢だろう。渡した座布団の上で正座をしているが、どこはかとなく幼さの感じるような座り方だった。

「…少し聞いても良いか？」

「うん？ 良いよ〜でもお父さんって昔から話し方変わらないんだね〜」

何かを言っていたが、俺には彼女に聞くべき内容で頭がいっぱいだった為によく分からなかった。

先ほど出会ったときは話し方が変わっていることも疑問ではあったが、それよりも気になることが目白押しなので頭に浮かんだ疑問を順々に解いて行くことにする。

「…悪い、まずは自己紹介からだな。俺は神凧聖。便利屋なんて仕事をしている…といっても要は臨時要員だな」

「えっと、今は穂波だよ。お父さんの娘です。よろしくお願いします」

「…今は？」

俺の疑問に構う事無く穂波と名乗った少女は軽快に頭を下げた後、じつとこちらを見始めた。

「…何か変な顔でもしていたか？」

「え？ …いや、やっぱり若いな〜って思ってた」

「十九で年寄り扱いされたら傷つくぞ…」

「あはは。でもほとんど変わっていないから顔を見た瞬間にお父さんだと分かったから安心して」

「…その事に関して聞きたいことがある」

慎重に言葉を選びながら少女に尋ねる事にする。

先ほどから少女・穂波の言う「お父さん」。この会話の間ずっと記憶を探ってみたが、全く思い当たることはなかった。

「…本当に悪いが、俺は君に『お父さん』と呼ばれる心当たりは全く無い。人違いじゃないのか？」

「それは絶対に無いよ。って言ってもお父さんが混乱するのも仕方ないよね。本当なら私たちはこの時代にいないからね」

「……？」

その訳の分からない言葉に思わず眉をしかめると、穂波は一つ咳払いをして姿勢を正した。

「その事に関しては私が説明させていただきます。ちなみに私は白雪です。よろしく願います、父さん」

急に纏う雰囲気が変わったことに少し躊躇った。その様子に少し可笑しそうに白雪と名乗った少女は口元を押さえて僅かに微笑んだ。「驚かせてしまってますみません。これが先ほど父さんも不思議に思っていた『私たち』の意味です。この身体には幾つあるのかはまだ分かりませんが、私・白雪と先ほど出ていた穂波を含めて複数の人格が存在しているのです」

「多重人格か？」

ふと思いついた単語を口にしてみるが、自分でも言っていて何となく違う感じがした。それを感じ取ったのか分からないが、白雪は説明をした。

「似ていますが、全く違いますね。私たちの場合は意図的に、多重人格にならないといけない状態だったのでこの状態になっているのであって、自然的に発生する多重人格とは大きく異なります。まあそれはさて置いて…」

立て板に水を流すようにスラスラと話す白雪の様子に、俺は何所かで見ることがあるような奇妙な感覚に襲われた。

そんな感覚も、次の一言によって一瞬で吹き飛ばされた。

「私たちは未来の父さんの娘です」

「…未来？」

いきなり出てきた単語を頭の中で反芻する。

初対面でそんな事を言われては、真っ先に精神障害などを疑ってしまうが、彼女の表情は真剣そのものだった。

「直ぐに信じてもらえるとは思っていません。実際、今の父さんの時代でも簡易的な時間軸移動は出来ませんが、世間一般には全く知られていませんし、一日の時間軸移動すらも難しいのがこの時代の現状ですから…」

「…一日未満とはいえ実現しているのならば、もつと大々的に知られていてもおかしくないのでは…？　そういうことには少し疎いからよく分からないが、確か数秒の時間を戻るだけでもかなりのエネルギーを必要とするなんて話を聞いたことがあるが…」

どこかの学者が『時間とは本来不可逆的なものであり、逆行する為には過去から現在、現在から未来に向かうために必要なエネルギーを遥かに上回るエネルギーを要する』などと書いていた記憶があるが…

「至極当然の疑問ですが、この研究をしていたのが非合法的な機関だったので公になることは全くありませんでした」

「時間軸の移動を利用して悪事に使おうとしていたのか？」

「恐らくは…その機関も、とある人物によって解体させられ、世界が合同で研究する事によって過去に限って長期間の移行^{シフト}ができるようになった」

「…？　それだと白雪達が帰れないのでは…？」

「時間軸移動には移行と返還^{リターン}があって、移行した人間に限り元の時

間軸に返還する事が出来ず。です。問題はありませぬ」

「…聞けば聞くほど混乱するな。ただ何となく白雪や穂波が来たのは大きな理由がありそうだ、ということだけはよく分かった」

ここまで言うのと、白雪も俺が何を尋ねたいのかが分かったようで、先ほど以上に緊迫した雰囲気を漂わせ始めた。

「聞こう、君達がこの時代、そして俺の元に来た理由を聞かせて欲しい」

世界規模で研究された成果を利用してまでここに来た理由。彼女達の存在は理解できたが、どうしてもここに来るべき理由だけが分からない。

「実は私たちが父さんの下にきた理由というのは…」

白雪は一瞬の間を空けると、決意したように言った。

「父さんに、死んだ原因となる便利屋を辞めてもらうためです」

「…死ぬ？」

あまりに唐突な言葉に思わず聞き返してしまった。

「はい、便利屋の為に…いえ、便利屋の所為で父さんは死にます」

白雪の表情は変わらず、感情の起伏が少なかったため、もう一度言われても実感が湧かなかった。

「…いや、しかし俺は普通に頼まれた事をこなしているだけだ。悪事かもしれないと思えば丁重に断るが…」

「それはあくまで現在の話です。『どの未来でも』父さんは様々な組織を相手にする事も少なくなかったそうなのです。その所為で命を落として…」

「……」

淡々と、白雪はそう努めているのだろうが、僅かながら声が震えていた。

「お願いします、どうか、便利屋なんて仕事は止めてください。お願いします…」

ゆっくりと下げられた彼女の頭は、酷く弱弱しかった。

「…確かに、俺が死ぬ未来はできるだけ勘弁して欲しいな」

「では…！」

「だからと言ってやめる理由にはならないな」

勢い良く上げられた白雪の一つの希望を見つけたような表情を見ても、これだけは譲ることが出来なかった。

「俺がこんな事をしているのは単なる偽善かもしれないが、それでも俺が動くことによつて救われる人がいるのなら、俺は心身共に傷つくことも厭わない」

「…家族を蔑ろにしてまで、ですか？」

恨みを込めたような口調だったが、その声を聞いているこちらは何故か胸が少し痛んだ。

「…それは今の俺には全く分からない。何しろ、家族というもの自体がまだ良く分かっていないからな」

「…そうですね」

それだけ言うと、白雪はゆっくりと立ち上がり、玄関から外へと出て行った。

さすがに時間を越えてまで来た娘に対する態度ではなかったと反省し、追いかけてようか悩んでいたところ、再びドアが開かれた。

見てみるとそこには大きめのポストンバックを持った娘がいた。

「…その荷物は？」

「着替えとか生活用品。さすがに全部がお父さんの物じゃ迷惑掛けるすぎると思つてね」

口調からして恐らく今は穂波だろう。怒っているのか踵歩きで目前まで迫り、叩きつけるようにポストンバックを床に置いた。今の浅海壮にしているのは俺だけなので周りの部屋に迷惑をかけることがないことが幸いだ。

目前で仁王立ちする穂穂は、声を高らかに宣言した。

「お父さんに便利屋を辞めてもらうまでここに住ませて貰うね！」

そうして、意図する事無く娘との共同生活が始まった。

翌日早朝。

習慣となつているので太陽が昇るよりも先に目が覚める。いつもと違うのは体の節々が痛むことだけだった。

身体を起こすと、自分が布団からずれた場所で寝ていることに気付いた。

何故かと思つて横を見てみると、昨日訪れた娘がまだ布団の中で幸せそうに眠っていた。

「…夢じゃない…か」

昨日話された様々な事実。そして今の俺の状態では、未来の俺は確実に死んでいる、ということ。これが夢であつて欲しいと思つには十分な要因だ。

「…しかし、幸せそうに寝ているな」

穂波か白雪か…どちらかは分からないが、彼女は寝返りを打つてこちらに寝顔を見せてきた。

非常に安心した、力の抜けきつた自然な笑顔だった。

それを見た瞬間、俺は思わず口の端が上がってしまった。

「…娘…か…」

正直に言えば家族を持てるとは微塵も思っていなかったため、彼女が存在しうる未来があるということはなんとなく嬉しかった。

「さて、少し身体を動かしてくるか…」

未だに眠っている未来の娘を起こさないよう静かに布団から出て修練着に着替え外に出た。

空はまだ瑠璃色に染まつており、街は目覚める前の静寂に包まれていた。

「おつす、聖。今日も鍛錬上がりか？」

修練を終えたあと、浅海社の前には義孝と出くわした。

日は既に東の空に昇り終え、燦々と白水町を照らしていた。

「…早めに切り上げて正解だったな。被害が出なくて良かった」

「何だ、俺を歩く災害のような言い方して？」

「自分の胸に手を当てて考えてみる。窓を破るわ、ドアの蝶番へし

折ったり、俺の愛読書を勝手に読んで感極まって畳を雀つたり…数え上げればきりが無いぞ」

拳げていけばよく今まで怒らなかつたと思議に思う位問題を起こしていた。

「…あれ、もしかして俺って聖に凄い迷惑掛けてた？」

「これから気をつけてくれれば良い…で、何の用だ？」

「いや、折角早起きしたもんだから聖と朝飯でもどうかと思ってな。ほら、握り飯と魚だ。魚は採れたただからかなり美味しいと思うぞ」

「そうか、それなら部屋で…」

そこでようやく義孝を部屋に上げることの危険性を理解した。俺のことを「父さん」とよぶ穂波がいることを知ったら、義孝にどう説明すれば良いのか…

「…義孝、すまない。朝飯は別の場所で食べないか？」

「？ 何でだ？ いつものように聖の部屋で駄弁りながら食べようぜ」

「いや…少し部屋に…」

「今更そんな事を気にする仲かつて。失礼するぜ」

「あ、待て義孝…！」

呼び止めるが義孝は一切止まる事無くいつの間にか作ったのか合鍵でドアを開けた。

「失礼しまーす！」

「お帰りなさい」

一瞬世界が止まった気がした。

ドアを開けた姿勢のまま義孝は固まってしまい、俺は思わず頭を押さえていた。

「あれ、お父さんじゃない？」

穂波はそう言つと、ドアのあたりに視線を移し、俺と目が合った。

「あ、お父さん。この人は？」

「…聖」

「…なんだ、義孝」

「いくら何でも中高生が相手じゃさすがの俺もフォローしきれないぞ？」

「…完全な誤解だ。これには訳があつて…」

「理由なんて聞くか！ いつの間に携帯使いこなして出会い系サイトに登録しやがつた！ どうすればこんな可愛い子が引つかかるのか、ちよつとそのサイトのアドレスと墮とし方を教える！」

「落ちて着け義孝！ 何を言っているかさっぱり…！」

「え、義孝さんってお父さんのお友達の義孝さん？」

穂波は驚いた様で、尚且つ懐かしい友人にあつたような顔をした。その反応は意外だったのか、義孝は静かにこちらに顔を寄せて小声で話しかけてきた。

「おい、聖。お前、俺のことをあの子に話したのか？」

「いや、お前のことは一切触れていないが…」

「初めまして、穂波っていいいます、いつもお父さんがお世話になってます」

「あ、いや、どちらかという俺のほうが世話になっていま…す？」
突然の挨拶にさすがの義孝もどう反応すれば良いか分からなかったようだ。

義孝に説明を終えて落ち着きを取り戻したのはおよそ三十分後だった。

「なるほど…穂波ちゃんは聖の死を避けるために未来から来た、つて言うことで良いのかな？」

「はい、お父さんは昔から頑固だったみたいで、昨日はどれだけ説得しても駄目でした」

「あはははは！ そうか、聖は未来でも全く変わってないのか！ それなら安心だな！」

説明後、義孝の用意した魚を焼き、握り飯を三人で分けて朝食を食べることになった。準備をしている間に二人は意気投合しており、俺は背後で弾む二人の会話を時折口を挟みながら聞いていた。

「…義孝」

「うん？」

準備を終えて壁に立て掛けておいた卓袱台を用意し、その上に義孝の用意した握り飯、先ほど焼いた鯖、昨日の昼に残った奈良漬を置いた。

義孝はよく来るので食器類は義孝用にもう一つ持っているのだが、稲穂たちは昨日突然来た為に紙食器と割り箸で我慢してもらうことにする。

が、それよりも義孝の受け入れがあまりにも寛大だった為に、思わず俺は義孝に尋ねていた。

「おかしなことを聞くようだが…お前はこの話を信じるのか？」

「お前の娘だったら十分信用に値するよ。それに…」

義孝は会話の途中から取っていたメモを静かに見た。『聖、殺害される』と書かれた部分を何度も何度も、絶対に忘れてはいけないうことのように丸が付けられていた。

「親友が殺されると聞いて何もしないほど、俺は薄情じゃねーんな」

…その時の義孝の表情は、いつに無く真剣で、恐怖すら感じるよ

うな怒りを表していた。

「それで、稲穂ちゃんが未来から来たって事は、俺の未来も知っているのか？ 結婚とか彼女とかいたりするのか？」

「が、それも一瞬のことで、義孝は直ぐにいつもの明るい表情になっただけだ。」

「え〜と…その…」

稲穂は困った様子で視線をさまよわせ、目を逸らしたままで答えた。

「よ、義孝さんも頑張れば良い相手が見つかりますよ！ きつと！」

「その優しさが胸を抉る！」

義孝は大げさに仰け反り、両手で頭を押さえた。

「はあ…でも、稲穂ちゃんは聖の未来を変える為に来たって事は、俺の未来ももしかしたら変えられるのか？」

「えつと…」

その質問に僅かな困惑を示すと、突然雰囲気が変わり落ち着いた空気を漂わせ始めた。

「稲穂では少し説明が難しいので私が説明します。初めまして、白雪といいます。よろしくお願ひします、義孝さん」

「おお、聖の娘は二人か？」

「ええと…一応そうなります」

珍しく白雪が口ごもったのが気になったが、義孝は特に気にせず白雪と話を続けた。

「それで義孝さんの未来に関してですが、私たちがこの時代の父さんに関与する事で別の人にも何かしらの影響が出ます。それが義孝さんに良い物か悪い物かは分かりませんが…とにかくそういう風に教わっています」

「教わる？」

「はい。さすがに時間軸の移行は非常に困難な上に悪戯に未来を変えて破滅に向かわないように、訓練されました。ちなみに時間軸の移行は世界の中でも選り抜かれた人にしか出来ません」

「…そういえば時間軸の移行の研究は世界合同の研究によって…と
言っていたな」

昨日の白雪の話思い出した。よくよく考えてみればそんな規模
の研究成果を普通の女子学生程度に使わせるはずが無いだろう。

「って言う事は、聖の娘は優秀なのか！ 良かったな、将来有望な
娘だぞ聖！ 喜べ！」

白雪のその話を聞いて何故か義孝が一番喜んでいて。背中を叩く
のは良いが強すぎるのは正直に言うとし痛い。

「話は戻りますが、行動次第によっては人との繋がりは途絶えたり
生まれたりと、絶対的なものは非常に少ないので、断言できること
はほとんどありません。ただ、私たちの知る未来の中では『義孝さ
んは独身』というのが何故か共通になっています」

「うん、覚悟はしていたけど、いざ突きつけられるときついねコレ。
あつはつはつは！」

言いながらも義孝は大して気にした様子も無く朗らかに笑ってい
た。義孝は非常に正直な性格であるため、表情で本心が分かる。

「で、でも気を落とさないで頑張ってください！ 努力次第で未来
は変えられますから！」

「ありがたいな、稲穂ちゃん…であついるかな？ まあ頑張るとす
るか」

最後に残っていた奈良漬を一口で食べきると、義孝は腕時計を見
て立ち上がった。

「さて、朝飯も食べ終わったし、俺はそろそろ大学に行くことにす
るわ」

「そうか、しかし今は春季休講じゃなかったか？」

今日は三月十五日。明心大学の新学期の始まりは四月上旬だった
と思うが…

「剣術部の方だな。もう水仙祭に向けての準備を少しずつ進めてい
るんだ」

「早いな…ああ、そういえば昨日羅刹師匠に演舞の話をしておいた

ぞ

「おおそうか！ それで答えは？」

「演舞だけではなく交流試合も行うなら良い、と言われたな。さすがにこれ以上の独断はマズイと思ったから、お前が会長あたりに話しておいてくれ」

「恩に着る！ 多分快くOKしてくれると思うが、それは聞いてから連絡するわ。携帯に出られる時間とかはあるか？」

「そうだな…」

そういわれて少し考えた。今日の予定は全く無いので都合の良い時でいいと、普段なら答えるだろうが…

何故かその時、目が穂波の方に向かった。

「？」

その理由が分からなかったのか、穂波は首を傾げていた。

そこで一つやるべきことが思い浮かんだ。

「少し稲穂達に街案内をするから、夕方あたりなら大丈夫だ」

「了解。それじゃあまたな！」

すると本当に時間が無かったのか、義孝は俺の返事を待たずに部屋を飛び出した。

部屋に残された俺と穂波はしばらくの間静かだった。

「義孝さんは相変わらずだったね」

先に口を開いたのは穂波だった。

どこか懐かしむような話し方だった。

「…穂波たちは義孝を知っていたのか？」

「うん。お父さんの親友で、何かと私たちを気に掛けてくれていてね。お父さんが居ない時は私とお母さんを守っていてくれたの。結構入り浸っていた感じかな」

「…そうか」

ということとは未来の俺は本当に家族を省みることは無かったのだろう。そう考えると少し申し訳なくなってきた。

「ねえ、お父さんと義孝さんって本当に仲が良いよね？ なんだか

お互い分かり合っているっていうそんな感じがしたよ」

「ん？ ああ、俺の数少ない親友だ。と言っても付き合いは知り合
いの中では一番短いが…」

「そうなんだ？」

穂波は心底不思議そうな顔をした。どちらかというとき驚きを隠せ
なかつたという風でもあるが…

「まあそれは長くなるからまた別の機会にでも話そう…ところでさ
つき思いついたことだが…」

「うん？」

「義孝には稲穂達を街案内するとは言ったが…勝手に決めて問題な
かつたか？」

「全然問題ないよ！むしろ大歓迎！」

急に卓袱台に身を乗り出してきた穂波に思わず圧倒され身体を退
いてしまった。

「あ、驚かせてごめん…でも、この街についてはあんまり詳しくな
いから凄く助かるよ！」

「…そうか。それならこれを食べ終えて少し休憩してから街案内と
行くか」

「分かつた！」

そう言つと突然穂波の食が早くなり、残り三つほどあつた握り飯
はあっという間に穂波の胃の中へと消えていった。

Home Town

白水町で生活する上で知っておかなければいけないのは、当然と
いふべきか生活必需品を扱う商店街だろう。

朝九時。土曜日である為普段より遅めに開店準備をしている店も
ある。

この商店街の最大の特徴は、探せば見つからない物はないという
ほどの店の数だろう。一人暮らしの人間である俺にはあまり必要の
無い店もあつたが（洋服や服飾等）、これから穂波、白雪と生活す
る以上はそのあたりも気に掛けないといけないかもしれない。

ここに来て穂波は商店街を見ると所々で足を止めて驚いたように
口を開けていた。

「わゝ…凄いな店の数だね」

「？ 穂波たちはこの辺りの事を知らないのか？」

娘ということのでつきりこのあたり位は知っていてもおかしくは
無いと思っていたが、予想を大きく外れていた。

「あ、はい。私たちはみんな父さんの死後にこの街を離れていたの
で…なのでこの商店街も生まれて初めて、ということになります。
ですがここまで大きいとは思っていませんでした」

白雪に入れ替わったようだが、今まで冷静な様子を見せていた白
雪も興奮を抑え切れないようで、俺がいなければさっさと先に行っ
ていそうな様子だった。実際、無意識のうちに脚が早くなつており、
声をかけて振り返らせると、白雪は自分が早足になっていたことに
ようやく気付き、さり気なく歩幅を狭くした。

「俺はここ以外の店を知らないからな…比べようも無いが、とにか
く良い所だ。それは俺が保障する」

「楽しみです」

そう話しながらしばらく歩いていると、背後から声を掛けられた。
「おっ、聖かい！ おはようさん、今日も良い天気で何よりだ！」

揚々とした声に振り返ると、胡麻塩頭に鉢巻といった、いかにも昔ながらの商売人といったようで、呼びかける声は遠くからだというのにも関わらず良く響いた。

「源さんか。今日は腰の調子は大丈夫なのか？」

「俺を年寄り扱いするなって言いてえところだが、まだ先月やつちまったのがひびいてるな…」

そう言いながら源さんは腰を叩いていると、俺の後ろにいる穂波を見つけた。

「聖、その譲ちゃんは？」

「ああ…」

どう説明するか一瞬悩んだ。正直に言うのもどうかと思うし、出来れば嘘はつきたくない。そう思っただけで出した答えが…

「俺の親戚で、神風穂波と言っただ。この街に来たばかりだからよろしく頼む」

「おお！ お前の親戚か！ 俺は源二つて言うんだ。ここの奴らは全員源とか源さんとかいつているから、嬢ちゃんも俺のことは好きだよように呼んでくれ！」

「は、初めまして！ 穂波って言います！ よろしくお願いします！」

緊張なのか少し戸惑いながらも穂波は源さんに負けず劣らずの音量で元気に答えた。

「おつ、元気があつて良いねえ！ 分からないことがあつたら何でもそこらにいる奴に聞きな！ 勉強以外だつたら答えられつから！」

「…お前と一緒にするな！」

源さんの声に、周りにいた商店街の店長達全員が突っ込みを入れた。

「…相変わらず息が合っているな…」

源さんの大声のおかげで店の準備をしていた店長達が何事かと思つて集まっていた。

この辺りは白水商店街独特の団結力かもしれない。

「おはよう聖君。昨日は十枚以上のポスターを貼ってたんだった？
お疲れさま〜」

「言ってくれりゃ俺達も手伝ったつーのにな、水臭え」
「今度水仙祭や白露祭に関してお仕事があれば遠慮なく言ってく
さいね」

順番に雑貨屋の店長、魚屋の大将（そう呼べ、といわれている）、
喫茶店のマスターが声を掛けてきた。全員何かと気に掛けてくれる
のだが、好意に甘えてばかりも申し訳ないので今回のポスターの件
は黙っていたのだ。

「すみません、けど自分が頼まれた仕事だったので自分一人でやる
べきだと思って…」

「固いこと言うなって、若いのが一人で黙々と仕事してるのに黙っ
てみているつーほうが俺達にや迷惑なんだよ。昨日の聖を見てウ
チの女房は『あんたも何かしな！ 聖君の手伝いとか！』とか何と
か言われたよ…」

「まあ終わった事を言っても仕方が無いから、私たちは店で宣伝で
もしましょうか」

「そうですね…ところで聖さん、そちらのお嬢さんは？」
そう言われたところでマスターたちの視線が穂波に向いているこ
とによりやく気付いた。人見知りなのか、何故か俺の後ろに、隠れ
るようではないが、四人の注目を避けるように立っているの、気
付くのが遅れてしまった。

「ああ…彼女は…」
「は、初めまして、神風穂波って言います！ 昨日からこの街に住
むことが決まりました、分からないことが多いので色々と迷惑をか
けるかもしれません、よろしくお願いします！」

穂波がそう言うと、何故か一瞬四人が沈黙してしまい、その雰囲気
に穂波は「なにか変な事を言ったかな？」といわんばかりに四人
を見回した。

「おい聖！」

すると突然源さんが俺の胸倉を掴んで激しく揺さぶってきた。

「嬢ちゃんがこの街に住むなら早く言えってんだ！ おいお前ら、歓迎会の準備を始めんぞ！」

「では会場は私の店でよろしいでしょうか？」

「飾りはウチの店に飾ってある物で大丈夫でしょ？」

「畜生、俺はなにすりゃ良いんだ！？ …… そうだ、たしか捨てた菊のやつが山ほど……」

「……やめるバカ」「……」

「畜生おおおお！」

朝の商店街に大将の叫び声が大きく響いた。さすが魚屋の店長というべきだろう、音量だけならトップクラスだ。

「すいません騒がしくなつて……では聖さん、お昼頃に私の店に来てください。商店街の皆さんにも声を掛けておきますので」

「分かりました」

「それじゃあね、聖君に穂波ちゃん 楽しい歓迎会にしないとね」

そういうと全員事前に話していたのだろうかと思うほど一緒に帰っていった。

騒がしく去っていく四人を見送ると、袖を引つ張られた。

「……父さんはこの辺りの人に大分好かれているのですね」

「……まあ、そうなるのか？ ここに来た時から世話になっているからな」

この街に来た当時の俺は五歳。俺の生涯を語る上には決して欠かせない場所だ。

右も左も分からない俺を、息子のように扱ってくれた。

厳しい事も言われたが、それと同じくらい優しく接してくれた。

便利屋ということを始めた切っ掛けのある場所でもあり、その恩は数え上げればキリがないほどだ。

「それじゃあ、時間が来るまで散策するぞ」

「うん」

穂波に入れ替わったようで、勢い良く敬礼をした後、商店街に歩いての話をしながらあたりをしばらく歩き回った。

散策し、ある程度の店を紹介し終わると時間になり、マスターの喫茶店へと向かうとそこには予想以上の人が集まっていた。

「す、凄く集まってるね…」

「この街の人は基本祭り好きだからな…歓迎とかは盛大だ」

「あ、聖さん。用意は出来ていますよ」

丁度店から出てきたマスターに見つかり、店内へと招かれた。

「お邪魔します…」

少し萎縮したように穂波が入ると、そこにも人に満ちていた。

会場である店の中心だけが、穂波たちの為に空けられており、周囲のテーブルは隙間なく埋まっていた。

「おお、来たか！ 待ってたぜ嬢ちゃん！ ほら、座った座った！」
源さんに促されて為すがままにその席へと穂波は座らされた。

が、穂波の近くに空いている席はなく、俺が何処に座ろうか悩んでいると、聞きなれた声が聞こえた。

「聖君、お邪魔してまーす」

「こんにちは、聖さん」

「おう、こっちの席を一つ空けておいたから座れ！」

稲穂に氷城親子が窓際のテーブルに座っており、俺が来るのを確認すると、稲穂は席をずれた。

「ああ、来ていたのか…」

「当然でしょ、白水商店街の一員として歓迎しないとね！」

「俺はただ酒が飲めるって聞いてな」

「道場の指導を抜け出そうとしていたので止めたのですが…無理でした。今は荒城さんに指導をお願いします」

「何をしているんですか、吹雪小父さん…」

何もしていないことがこの場合は問題なのだろうが…おそらく昨日の会話を見事に忘れていたのだろう。お酒を飲んでいたので意識

があやふやな状態だったのかもしれない。

「出雲さんは？」

「さすがに今日はお母さんまで抜け出せないみたいで…私だけでも行つてきなさい』って言われたから、私だけ来たんだよ」

「…少し悪いことをしたか？」

「大丈夫だと思うよ。『これが明日あたりの地域ボランティアさんに準備するのに比べれば全然余裕よ』なんて事言っていた位だから」

「…今日のお礼として、明日は手伝わせていただきます、と言つておいてくれ」

出雲さんは稲穂の母であり、旦那である穂高さんが亡くなった後、オオシマベーカリーを一人で切り盛りしてきた人だ。

稲穂とは性格が全く異なり、非常に落ち着いた女性であり、和みを求める為だけにオオシマベーカリーに通う人も少なくないほどだ。大嶋家とは知り合つてから八年ほどで、忙しいときは何かと仕事を頼まれる。主な内容としては運搬等で、女性だけの大嶋家にとつては一応重要な力仕事をやらせてもらっている。

「わかつたよ…ところで聖君にあんな可愛い親戚がいたなんて初めて聞いたよ」

「はい、私も聖さんの家族は亡くなっていると聞いていたので驚きました。聖さんの従妹でしょうか？」

二人は少し躊躇いながらもそう口にした。

氷城と大嶋そして義孝には俺の事情は話しているので、色々な面で気に掛けてくれている。だが今回はそれが逆にネックとなつていた。

「いや…まあそんなものだ」

直ぐに良い返しが思いつかず、濁すようなものになつてしまった。

「…つていう事はあれか、聖はあの娘と同棲してるのか？」

その一言によつて稲穂と雪華の表情が鬼気迫るものになつた。

「聖君それ本当！？」

「そうだとしたら私が聖さんに肅清を…！ あんな小さな子供相手に！」

「少し落ち着け、小父さんも変な事は…って聞いていないな、これは…」

爆弾を落とした張本人である吹雪小父さんは既に別の席で酒盛りをしていた。何処から出したのか分からないような高そうな酒の一瓶瓶を片手に、源さんや大将を筆頭とした中年組が勝手に盛り上がっていた。ちなみにこの喫茶店では酒の類は一切取り扱っていない。「聖君、説明してもらえるかな？」

「返答次第によつてはここで介錯しても良いですが…」

この場から消え去りたい…

そう思ったが、逃げ出そうにも出口までの通路は酒盛り中年組の所為で通行止め状態になっており、他に手段はないかと考えていると…

「すいません！ おじさんたちの所為でこつちに来るのが遅れました！」

穂波が滑り込むようにこちらにやってきた。

「初めまして、神風穂波です！ 今日から浅海社にお世話になります」

「えっと、穂波ちゃん？ 聖君と同棲つて言うのは本当？」

僅かに顔を引き攣らせながら稲穂が静かに聴いてきた。

その表情をみた穂波は、何かを感じ取ったのだらう、一瞬俺のほうを見た後に答えた。

「いえ、確かに一つ屋根の下ですが、私は二階のほうに住まわせてもらうことになりました」

「そう、それなら良かったです」

「よかったです…」

穂波：いや、白雪がそう言ったことによつやく俺に向けられていた殺気がなくなった。

白雪は場の雰囲気や和らいだのを確認すると、雪華の隣へと座った。

「あの席にいらなくて大丈夫なのか？」

「はい。『他の人にも挨拶をします』と言ってきたので。それに私がいなくても盛り上がりつつありますからね」

「…違うない…」

歓迎の気持ちもあるのだろうが、やはり騒ぎの雰囲気呑まれて本来の目的を忘れている人が多いのだろう、先ほど白雪たちのいた辺りでは商店街メンバーが白雪が戻るのを待たずして話が進んでいた。

「すみません、折角の歓迎会のゲストをろくにおもてなしできなくて…こちらは当店オリジナルのパフェになります」

そんな中ただ一人、この店のマスターがやや大きめのサイズのパフェを白雪の前に静かにおいた。

「時間が無かったのであまり良い出来ではありませんが…洋菓子は大丈夫でしょうか？もし苦手でしたら何なりとお申し付けください」

俺と大して歳が変わらないマスターは、丁寧に白雪に接していた。「いえ、甘いものは好きです。けどこれは…食べるのが勿体無いですね」

大きな器に、白雪の目線の高さにまで盛られたアイスやクリームフルーツ。けれども上品にフルーツソース等でトッピングされており、一種の芸術ではないかと思ってしまうほどの出来栄であった。

そして何よりも粋だったのはシュガープレートに書かれた『Welcome, Sirramizu! Dear Honami Kaminagi』だった。

「手の込んだ演出だな…」

「折角の歓迎ですからこれくらいは大目に見てください。それよりも聖さんが事前に話していただければもっと大きなもの…ケーキ等を用意できたのですが…」

「…ちなみにどれ位のサイズになるんだ？」

「一日あれば五段サイズが出来ますね」

「事前に言わなくて正解だったな…」

歓迎会でウエディングケーキクラスのサイズが出てくればさすがの白雪も嘖然とするだろう。そういう意味では今日源さんに話したのは正解だったかもしれない。

「これを短時間で作ったんだ…相変わらずマスターは凄いね」

「稲穂さんと雪華さんにはこちらを用意しました。聖さんはもう少し時間がかかるので…」

そういつてマスターはトレイの上に乗っていたケーキを二つテーブルの上においた。こちらもかなり手が込んでおり、雪華に対してはシンプルでありながらも色取り取りなショートケーキ、稲穂に対しては半分に切ったオレンジを器にし、橙色の色鮮やかなクリームをモンブラン状にしたケーキが用意された。

「う…やっぱり食べるのが勿体無いよ…」

「そう言わないでください。職人にとっては綺麗になった食器が最高の褒め言葉なんですから」

「何かの雑誌に載ってもおかしくない出来ですからね…何故そういう宣伝等はないのですか？」

「私の理想は『お客様が喜んでいただける』ことで、私自身は名誉なんて要りませんからね。有つてもにわか客などで常連さんを不快にさせるだけだと思ひまして…まあ、面倒だからという理由もありますが…」

少し照れたようにマスターは笑いながら答えた。

「それよりも食べてみて感想を聞かせてください。今後の参考にさせていただけますので」

「あ、はい。ではいただきます」

白雪の挨拶を合図に三人が同時にスプーンで目の前のものを掬い口へと運ぶ。

「…美味しいです！こんなに美味しいパフェは初めてです！」

「そうですか。気に入っていただけのなら幸いです」

白雪の反応にマスターは静かに微笑んだ。

「相変わらずマスターは謙虚ですね。もう少し腕を誇りにしても問題ないと思いますが…」

「そうだよ、オリジナリティもクオリティも高いんだから！」

そういう雪華と稲穂は既に二口目に入っており、二人とも幸せそうな表情をしていた。

「ありがとうございます。ですが、私は美味しいとっていただければそれだけで十分満足ですので…では、ごゆっくりどうぞ。あと、聖さんは厨房に来ていただけますか？」

「…なるほど了解。それじゃあ三人で話していてくれ」
マスターの意図を理解し、俺は厨房へと脚を進めた。

「えっと、色々あって自己紹介が遅れました。私は氷城雪華です。道場で少し指導等をしています」

「私は稲穂、大嶋稲穂だよ。よろしくね！」

「はい、よろしくおねがいします。雪華さん、稲穂さん」
父さんがマスターに何かを言われ、厨房に向かって行くのを見たあと、その場に残った私、雪華さん、稲穂さんは改めて自己紹介をし合っていた。

席は紹介しやすいように雪華さんと稲穂さんが並び、それに私が向き合う形になった。

雪華さんは座っていても姿勢が非常に良い為か背が高く感じられる。

対して稲穂さんは先ほど怒鳴って以降ずっと笑顔を保っており、見ているだけで不思議にも安心感を得られた。

「何か分からないことがあれば私たちにどんどん聞いてね。この街のことだったら任せて！」

「私は稲穂さんほどではありませんが、答えられる範囲であれば…」
稲穂さんは胸を張り、雪華さんは静かにそういった。

来たばかりのこの時代、この場所で、不安はあったが、それも二人の言葉で一瞬にして吹き飛んでしまった。

「ありがとうございます！ それなら一つ聞いてもいいですか？」
先ほどの会話を聞いたところ、二人はかなり父さんと親しい状態だと分かったので、探りを入れてみると気付かれないように聞いてみる。

「お…聖さんってどんな人ですか？」

「え、親戚なのに聖君をよく知らないの？」

「はい、この街に住むなら聖さんを頼りにしなさい、といわれただけなので…」

「どうしよう…聖君は…説明が難しいね」

「そうですね…聖さんが便利屋をしていることは知っていますか？」

「はい、昨日挨拶をしたときに話してくれました」

咄嗟に思いついた嘘ではあるがこれくらいは許容範囲だろうと思う。雪華さんは私の答えを聞いて続けた。

「普通の人なら怪しがられて終わりですが、聖さんの場合はこの街の人全員に信頼されているのでそんな事が長く出来るのです…聖さんが便利屋を始めて…今年でもう五年ですね」

「私が中学に入った頃だからそうだね。本当に長く続いているよね」

「道場・学業に仕事を全て全う出来ていたというのはさすがに驚きました。私では到底真似できませんでしたから」

「始めた頃はお店の手伝いくらいだったけど、今では警備とか治安維持にも貢献しているからね」

父さんのことを話す二人はどこか誇らしげにしている感じがした。「とにかくこの街で一番頼りになる人だね。それより詳しく話すのは難しいくらい…」

「ただもう少し周りを頼っても良いのではないか、と思いますけどね。何でも一人で背負ってしまうタイプの人ですから…と、聖さんが来たのでこれくらいにしましょう」

雪華さんの言うとおり、父さんがトレイを片手に厨房から出てきたので、別の話をする。チラリと時計を見てみると、父さんが厨房

に入ってから十分くらい経っていた。

近づいてくると父さんは一つ頷いた。

「俺がいない間に大分仲良くなつたようだな。良かったな、穂波」
そういいながらトレイの上に乗っていたものを順に私たちの前に置いて行く。

それは和菓子で、小さな皿に桜餅が一つずつおいてあった。

「雪華と稲穂には感謝の意味を込めて、穂波にはこの街に来たことへの歓迎で」

「聖さんは大分気合が入っていましたよ。やはり和菓子だけは聖さんに勝てそうにありませんね」

「いくらマスター相手でもこれだけは譲れないな」

後ろから覗き込んでいるマスターは少し残念そうな表情をしながらも、何かをメモしている。次のページへと捲った際に見えたのは『蒸し時間：秒』などと書かれており、父さんの料理法を見て色々メモをしているようだ。

それに気付く事無く、父さんは私の隣へと座った。

「まあ、雪華、稲穂。これから穂波と仲良くしてくれ。便利屋が頼むというのもおかしい話だが、宜しく頼む」

「分かったよ！」

「分かりました」

その後は商店街についての話をし、歓迎会が終わる三時までの間、夢中になって二人と話し続けていた。

歓迎会が終わわり、二人と別れた後、中にいる穂波も、こう思った。

(やっぱり、昔から母さんは母さんでした)

「：何をしているんですか、父さん？」

歓迎会も無事終わり、残りの店を教えると丁度日が暮れてきたので浅海壮へと戻ってきた。

夕飯の準備をしていると、後ろから白雪が変なものを見るような目でこちらを見ていた。

「なにつて…見ての通り炊飯だが？」

「それは分かります」

「なら何が分からないんだ？」

「いえ、どうして父さんはかまどの火に息を吹きかけているのかが分からないのです…」

白雪の視線は俺の前で赤い火に熱されている釜をみてそういった。現在俺と白雪のいる場所は浅海壮の裏庭で、そこに置かれているかまどを使って米をたいているところだった。

「…炊飯器は使わないのですか？」

「機械音痴だからな」

「現代人としての生活としてどうなんですか、機械も使えないというのは…少し設定してボタンを押すだけだった気もしますが…」

「無理だ」

「即答ですか！？」

「最近ようやくガスコンロの使い方が分かったんだ、これ以上機械の操作を覚えるのは難しいぞ」

「私としては最近の家電製品の扱い方が分からない方が難しいですよ！」

「といつても、今までこれでやってきたから問題ないぞ。慣れると焦げを自由に作れるからな」

「今までどんな生活をしていたんですか…」

「薪が生活必需品だ。生活に関しては全て享楽さん仕込みだ」

「…享楽さん？」

「ああ。浅海壮の大家で、俺の保護者だ。今はどこかに出掛けているみたいだから会わせられないが…っと、火が弱まったな」

小さくなりかけた火に再び息を吹き込み、火力を大きくする。強すぎて弱すぎても良くないので初めは調整が難しいが、慣れてしまえば肌を感じる熱さでも分かる。

息を吹き込んでいると、白雪は興味を持ったのか直ぐ後ろまで近寄ってきて、覗き込むようにその様子を見始めた。

「…私もやってみて良いですか？」

もうしばらく待てば完成というところで、白雪は小さな声で俺にそう尋ねた。

「？ 白雪が、か？」

「はい、話には聞いていましたが、実際に体験したことがないので…」

「…もう直ぐで終わりだが…まあ少しやってみるか？」

「はい！」

竹筒を渡すと白雪は少し表情を明るくし、嬉々として俺からそれを受け取った。

「やり方はわかるか？」

「多分大丈夫です…では…」

一つ大きく息を吸うと、竹筒に口をつけて吹いた。

「おお、上手いな」

が、俺がそう言った直後、白雪は急に噎せ始めてしまった。

「っと、大丈夫か？」

「ケホっ…は、はい…ケホっ！ 間違えて吸い…ケホっ…こんで…」

その白雪の姿に俺は思わず…

「クッ…！ ハハハ、なるほど吸い込んだか、さすがにそれはむせるだろうな！」

笑ってしまった。

ごく自然に。

至極当然に。

声に出して。

「わ、笑わないで…ケホ、ください…」

「悪かったな、しかし白雪らしくないな、と違ってつい、な。ククク…！」

抑えてはいるが、それでも笑みが零れ出てしまう。

そしてそれと同時に。

何となく、愛おしさが、胸の奥からあふれ出していた。

夕食を食べ終え、丁度食器を洗い終えたところで義孝から渡された携帯が音を立てて震え始めた。

「…すまん、穂波。この携帯が震えているのは何だ？」

「お父さん、そんな事も分らないの!？」

信じられない、といった表情をしながら震えている携帯を開き、

穂波はいくつかボタンを押すと電話を耳に当てた。

「こんにちは…はい、今お父さんに代わります」

穂波は『義孝さんから電話』といって俺に電話を渡してきた。

先ほど穂波が使っていたように電話を耳に当てると、義孝の声が聞こえた。

『おう、聖か。今は話せるか?』

「ああ、丁度時間が空いていたところだ。しかし、電話が震えることは全く聞いてないぞ?」

『…ああ、そうか。説明してないな。ということは穂波ちゃんがいなければ電話は通じなかったのか…あとで穂波ちゃんに代わってくれ、礼を言っておかないとな』

『まあいいや、じゃあ羅刹師匠からの提案は無事にOKをもらえたぞ、と。やっぱりというか二つ返事でのOKだったぞ』

「そうか、良かったな」

『まあこれも聖の仲介のおかげだな。改めて礼を言わせてもらおうよ、ありがとうな』

「気にするな、こっちも久しぶりに道場に顔を出す良い切っ掛けになったからな」

『そう言ってもらえると助かる』

そういつて義孝はいつものように豪快に笑った。

『とりあえず報告はしたが、師匠には俺から話すから大丈夫だ。多分お前のことだから明日辺り誰かから仕事を頼まれているんだろう

？』

「正解だ。明日は出雲さんの手伝いだ」

『そうか。まあ頑張れよ。それで穂波ちゃんに電話の使い方でも教わっておけよ』

「善処する」

『…不安だな、ちょっと穂波ちゃんに代わってくれ。その方が安心だ』

「心外だな…」

そういいながら電話を再び穂波へと戻す。

いくつか言葉を交わすと穂波は電話を耳元から離して何かのボタンを押した。

「…それでは父さん」

その口調は白雪のもので、非常に嬉々としていた。

「白雪の携帯電話講座、始めますよ。時間は今日が終わるまでです」

その言葉通り、白雪教授による講義は三月十五日が終了するその瞬間まで行われた。

Nightmare

「おつかれさま、聖君。今日は凄く眠そうにしていたわね？ 良く眠れなかったの？」

「…おつかれさまです、出雲さん。まあ少し覚えなければいけないことがあったので少々…」

寝る時間はあったが、習慣とは恐ろしいもので、体が眠いと分かっただけでも決まった時間に目が覚めてしまい、更には身体を動かさなければ気持ち悪い状態になるほど骨の髄まで染み付いていた。

また白雪と穂波からは「覚えるまで復習！」と言われ、布団に入ってからまずつと説明書に目を通しており、眠ったのは普段起きる時間の三十分前：つまり睡眠時間は三十分にも満たなかった。

「駄目よ、いくら若いと言っても睡眠は絶対に削っちゃ。人は食べる寝るを十分にしないと身体を壊しちゃうからね」

「心配をかけてすみません。ですが今日これから帰ったら十分に休みますので」

「はい、お姉さんとの約束よ。実は今日聖君が眠そうにしているのを見て、休んでもらおうかななんて思ったくらいなんだから」

一応気取られないように気をつけてはいたが、オオシマベーカーリ―到着から僅か数秒で出雲さんに看破されていた、というわけだ。

本当にこの人の観察眼には敵わない。

この間の伸びた応答をするのが、昨日少し話にあがった出雲さんだ。

長い髪に僅かにウェーブがかかっており、肌は娘の稲穂と異なり白い。とても一児の母とは思えないほど若々しく、初めて見た人は稲穂の姉と勘違いするほどで、本人が『お姉さん』というのは俺が始めてあったときに間違えた名残である。

本人はそれが非常に嬉しかったようで、それ以降『小母さん』という全く反応してもらえなくなってしまうた。

「でも聖君が手伝ってくれたおかげで今日は大分スムーズにお仕事が出来たわ〜」

「役に立てたのなら幸いです」

ちなみに今は、既にボランティアの人たちには差し入れを配り終え、ベーカリーの前で空になった箱を下ろしているところだ。

結構な数があったので最初は重かったが、帰りは非常に軽く、後片付けもスムーズに進んでいる。

「それで、聖君は今日のお昼はどうするの？ 余ったパンがいくつがあるから持って帰る？」

出雲さんは残ったパンを集めた箱を見ながら尋ねてきた。本当に「いくつか」という表現が当てはまるぐらい少なく、大嶋家のパンの人氣が伺える。

「助かります。それじゃあ…」

箱を覗いてみると、アンパンとメロンパン、葡萄パンが一つ二つ入っているのが見えた。

一応運んだ物の中には焼きそばパンなど惣菜パンも多めに入っていたのだが、さすがにそれは人氣の為に無くなってしまったようだ。

「…見事に甘いものばかりですね…うん？」

そこで目に入ったのは、一昨日稲穂が試食用に渡してくれたパンだった。

二つ残っており、俺の分と穂波の分で丁度良いと思った。

「それじゃあ、その稲穂の試作パンをお願いします」

「あら、聖君はこれが気に入ったのかしら〜？」

何か面白いものでも見つけたように、出雲さんは先ほどよりも良い笑顔でそう言ってきた。

「？ ええ、自分の好み合っているの？」

その言葉を聞いた途端、出雲さんはフッフ、と笑い始めた。

「ごめんなさい。それは稲穂が聖君の好み合つように…」

「お母さん！」

出雲さんが言い切る前に、頭上から大きな声が聞こえた。

声のしたほうを見てみると、二階の窓から顔を出して稲穂が叫んだということが分かった。何故か顔を紅くしており、母親であるはずの出雲さんに恨みがましい視線を送っていた。

「あら、これ以上は稲穂を怒らせるから私は退散ね」

「…いや、既に手遅れだと…」

「それじゃあ聖君、お疲れさま」

「ちよつとお母さん！ こっちに來て！ あ、聖君はお疲れ様！

また今度ね！」

相変わらずのマイペースさに呆れながらも、俺は去っていく出雲さんの背中を見送った。

店の奥からは稲穂が勢い良く降りてくる音が聞こえ、出雲さんが店の奥へと消えると同時に稲穂の怒り声が僅かに響いた。

何を話しているかは分からないが、稲穂の怒鳴り具合からかなりのご立腹のようだ。

時折『なんであることを…』とか聞こえたが、詳しい内容までは分からなかった。

さすがにその場に立ち尽くすわけにもいかないので、大嶋家を後にした。

とりあえずもらったパンを袋に詰めて、商店街の中心にあるベンチに行くと、待ちわびていたように穂波が座っていた。

ベンチの左端に、右には俺を座らせるために空けていたのだろう。俺は静かにあいている方に座り、持ってきた袋を穂波に手渡した。

「…まあ、見てもらったら分かるだろうが、あれが俺の普段の仕事だ。危険なんて殆ど無かっただろう？」

「…そうだね。確かに今の状態が続くなら何も問題は無いんだけどね」

実は穂波たちには、俺の仕事の場面を見たいということで、出雲さんに気付かれないようついてきてもらったのだ。

昨日の講義の最中について「出雲さんに頼まれた仕事があるので早めに終わらせて欲しい」と言ってしまったために、穂波たちがつい

て行くと言い出したのだった。

半日中視線を感じて不自然な感じはあったが、それも穂波たちの理解を得るために我慢をしたのだが、結果は余計に不機嫌にさせただけだった。

「こんな風に本当に手伝い程度の仕事なら問題ないのだろうか？ それなら心配することは…」

「それじゃあ聞くけど、お父さんはこの街の…白水町の皆が命の危険にさらされるとしたらどうするつもり？」

突然の、大きな話を持ち出されて一瞬驚いたが、俺は迷わず即答した

「当然助けるに決まっている」

「お父さんの命を引き換えにしても？」

「それだけで皆が救えるなら。俺一人の命は安いものだ」

即答はしたが、何故かその瞬間、心の軋む音が聞こえた気がした。心当たりは…家族、という単語だけだった。

それが何を意味するのかは分からないが、考えれば考えるほど心が軋む音が大きくなっていくのだけが分かった。

穂波はその答えが気に入らなかったのか、恨めしそうにこちらを睨み付けた。

「……」

「……」

「…本当に、便利屋を辞めてはくれないんだね」

「悪い…だが、どんな時にでも、助けを求める人はいるんだ。もしかするとその人たちは、助けを求めていながらも声をあげられない人だっているかも知れないんだ」

一瞬、嫌な記憶が頭を掠めるが、振り払って穂波を見つめる。

目が合った瞬間、穂波は悔しそうに口を引き締めていた。

それはどこか自分に何かを言い聞かせているようにも見えたが、しばらくすると彼女は口を開いた。

「…その助けを求める声が、家族なのに、父さんは何も変えようと

しないのですね…」

口調から白雪だろう。二人揃って静かな怒りである。

「残念だが、その通りだ」

「父さんをそこまで動かすものは何なんですか？ この街の人への恩情ですか？ 正義感ですか？ それとも諦めですか？ 私が父さんに死ぬと伝えたことで更に自暴自棄に…」

「それは違う」

白雪の話が途中であるにも関わらず俺は口を挟んでいた。

「確かに、穂波たちから死を宣告されたことは驚いたが、それだけは断じて無い。恩情？ たしかに俺は白水町の皆には数え切れないほどの恩があるが、だからと言って命を賭ける理由にはならない。じゃあ正義感か？ 命を引き換えにしてまでも英雄視されるつもりは毛頭無い、むしろ『死んでまで』という正義はただの無謀蛮勇だ。

なら自暴自棄か？ 馬鹿を言うな。俺は死が宣告されても最後まで抗ってやる」

「それじゃあ何故…！」

悲愴に満ちた表情で白雪は叫んだ。

辺りにいた客達は何事かとこちらを見てきたが、気にするほどのことではない。今は白雪達に俺の意志を伝えなければならぬ。

「悔やみたくないからだ…」

「…え…？」

「…もう二度と…あんな無力感を味わいたくないからだ…」

俺が原因となって死んだ二つの命。

俺の力不足が原因で、二人を犠牲にして、俺が生き残ってしまった。

もう二度と帰ってこない。

もう二度と会うことは出来ない。

もしあの時、少しでも勇気を振り絞っていれば。

もしあの時、俺に恐怖に抗う力があれば。

後悔しても、時は既に遅く、罪だけが俺に残った。

「自己満足だと思えば笑え、偽善だと思えば呪え、贖罪だと思えば嘲れ。それでも俺は、これが最善だと思って、生き……」

そこまで言ったところで、振り払ったはずの記憶が蘇り、頭の中を紅一色に染め上げる。

鼻腔を貫く血の香り。

視界にチラつく肉片。

脳まで響かんばかりの砕骨音。

閉じ込めていたはずの記憶が、全てが、鮮明に蘇る。

死ぬ前に見せた、あの人たちの、笑顔も……

そしてその直後に、生きぬ肉片へと成り果てた瞬間も……

「ゲオ……ゴホッ！　うをオヲオ……！」

「お父さん!？」

思い出すだけで、胃から何かが逆流しそうになる。

幸い、途中で思考を停止する事で吐き戻すまでには至らなかったが、心を蝕むには十分な威力だった。

荒く息をつくのを見た穂波はさすがにまずいと思ったのか、慌てて背後に回り背中をさすってきた。

だがその甲斐なく、俺の意識は暗闇に落ちた。

「…聖さん、大丈夫ですか…？」

「…その声は…雪華か？」

…どれほど時間が経った頃だろうか、意識が戻ると心配そうに雪華がこちらを見ていた。

視界の端には白水商店街のルーフが見えており、頭に感じる感触から、雪華に介抱されていたのだろう。

商店街のベンチに横になり、雪華に膝枕をされる形になっていた。僅かに香るシトラスの香りが何となく心を落ち着かせていた。

身体を上げようとすると、雪華に頭を押さえられて立ち上がるのを止められた。

「…すまない、それだと起き上がれないのだが…」

「安静にしてください。まだ休まないと…」

「いや、もう大丈夫だから…」

「真っ青な顔で言われても何の説得力もありません。もう少し落ち着くまで安静です」

雪華は有無を言わせない、と言わんばかりに俺の言葉を遮った。

雪華は一度決めると絶対に譲らないところがある。それを知っているので俺は諦めて素直に従うことにした。

諦めて力を抜くと、自然と体を感じていた痺れが薄れ、気が楽になった。

「でも聖さんが倒れるなんて初めてですね…何かあったんですか？」

「…いや…」

雪華の表情はこれ以上無いほど真剣なものだったが、俺はその目を真っ直ぐに見ることができなかった。

…あの話をするべきではないだろう…そう判断してのことだ。

「…少し…嫌な事を思い出しただけ…大丈夫、直ぐによくなる…」

「…そうですか。でも無理だけはしないでくださいね？ 聖さんに

何かあったら悲しむ人がいるんですから…」

「…善処する」

答えに雪華は不満を持った顔をしたが、それも直ぐに和らいだ。

「…約束ですよ」

普段聞くことの無い、柔らかな声音だった。

「…ところで穂波がいないようだが…？」

先ほどから声がしないことに、何かあったのかと不安になって聞いてみた。

可能な限り首を回して辺りを見てみるが、それらしい影は無かった。

「穂波さんには浅海壮に戻って直ぐに聖さんが休めるように準備を
してもらっています」

「…そうか…」

「目の下にクマが出来ていますが…寝不足ですか？」

「少し、な…覚えることがあって」

「そうですか…」

それだけ聞くと、雪華は静かに待った。

「雪華はどうしてここに？」

「父上が皆さんの指導をしているので、今日は休みということになりました。それで商店街を散歩していたら、倒れた聖さんと戸惑っていた穂波さんを見かけて…」

「…悪いな、折角の休みを台無しにして…」

「いえ、丁度休憩しようと考えていたところなので、気にしないでください」

「…そうなのか？」

「はい。それに聖さんが寝ていたのは大体三十分くらいなので、大した時間ではありません」

そう言われて俺はポケットに入れてある懐中時計を取り出した。

確かに雪華の言つとおり、倒れてからそれくらいの時間が経っているのだから、時計は十一時半を指していた。

「もう昼頃か…」

「そういえば、聖さん。昼食は…」

「まだだが、さすがに食えないな…雪華の言うとおり、体調がまだ不完全みたいだ」

言いながら懐中時計を元に戻す。

その際に何が原因か分からないが、携帯電話が反対のポケットから落ちてしまった。

それが地面に着く前に雪華は素早く拾った。

「…っと、何か落ちました…って、これは…携帯電話…ですね」

「あ、ああ」

「…これは聖さんの、ですか？」

心底不思議そうに雪華が尋ねてきた。俺は黙って頷いたが、それでも疑問を持っているような表情をされた。

「でも聖さんは機械が扱えないのでは…？」

当然の疑問だろう。昔道場の合宿で炊飯係を任されて、庭で飯盒を使っていたのをみられて驚かれたのが記憶に新しいのだから。

それ以降、それでは生活が不便だろうと思われ、雪華がガスコンロの扱い方を教えてくれたのだ。

その期間およそ三ヶ月。完全に覚えるまでは氷城家に泊り込みで、だ。

一つ覚えるのにもそれだけの時間をかけてしまうほどだったのだ。疑問に思われても仕方ないだろう。

「…それが寝不足の原因だ」

恥ずかしいが正直に告白する事にした。

「昨日義孝から連絡が来て、その時穂波に話して、俺が電話を扱えるように言っただけで…おかげさまで寝たのは今朝だ…」

「そうなのですか…それで、操作は覚えられたのですか？」

「少しは、だな。さすがに細かい設定までは無理だったが、何とか通話とメールというものができるようになったな」

それまでに何十回穂波に怒られたのかは覚えていない。

しばらく青い携帯電話を見つめていた雪華だが、俺に返すと少し

躊躇いながら聞いてきた。

「聖さん、もしよければ私とアドレス交換をしませんか？」

「？ 雪華は俺の番号を知らないのか？」

「はい、全く。と言うより、聖さんが電話を持っていること自体今日知ったので…」

「そうなのか、てつきり義孝が教えていると思ったが…」

義孝にしては珍しい行動だと思った。

気を利かせて知り合いの氷城親子、大嶋親子には伝えていてもおかしくは無いのだが…

本当に忙しくて忘れていた、という可能性も捨てきれないが。

「分かった、それじゃあ確か…赤外線だったか？ 少し待っていてくれ」

記憶を必死に引っ張り出して、時間を掛けながらもようやくその一歩前の画面に到達する。

「…よし、準備はできたから…」

「こちら準備できました」

言葉通り、雪華は既に彼女ののものであろう、水色の携帯電話を取り出してこちらに向けていた。

「…早いな」

「聖さんが遅いだけです。本当に覚えてたんですね」

「悪かったな」

「いえ、全然。ただ、聖さんもやっぱり人なんです。何でもこなすと思つたら、意外なところに欠点があったり…毎日見ても飽きません」

「…送るぞ」

少し照れくさくなって言葉が少なくなってしまうた。

機器で雪華の顔が見えなくなり、その状態が数秒。

「届きました」

そう言つと雪華は嬉々としてこちらに画面を見せてきた。

画面には『登録番号77 神凧聖』と出ていた。

「77番ですね。縁起がいいと思いませんか？」

「…そうだな」

雪華は子供のように、小さな事でありながらも喜びを感じていた。それは今も昔も変わらず、茶柱が立てばその日一日機嫌が良く、目の前を黒猫が横切ればいつも以上に気を張る彼女の姿だった。

普段は厳しくあろうとする彼女であるが、剣から離せば一人の少女なのだ。

剣を持ち、向き合っているときに見せる真剣な表情ではなく、些細なことにも感情を表現する心優しき少女の表情だった。

喜んでいる雪華の隙を突いて身体を起こし、席を立つ。

「話していたら気分も落ち着いたな。ありがとう」

「分かりました。ですが、今日はゆっくり休んでくださいね。家に帰って寝るまでは私も同行します」

「…了解」

浅海壮に向かっている間ずっと、雪華は俺の後ろに付いていた。重い足取りである俺を追い抜く事無く、ゆっくりと付き添っていた。

「聖く、見舞いに来たぞ」

雪華に見送られて浅海壮に着くと、雪華の言っていた通りに穂波が待っていた。

部屋に入ると既に布団はしかれており、眠るまでのしばらくの間二人に監視されていた。

やはり精神的に参っていたのかもしれない、人の眼が有るにも関わらず、義孝が部屋に入ってくる時の声が聞こえるまで熟睡してしまっただ。

言い換えれば義孝の声で目が覚めてしまったのだった。

「義孝さん、出来れば静かに入ってきて欲しかったな」

穂波は呆れたように溜息を吐きながらそう言った。目が覚めた俺の枕元に静かに座っていたのと、寝たときには無かった洗面器と起きた時に布団に落ちた濡れタオルからずっと看病をしてくれていたのかもしれない。

「悪いな、穂波ちゃん。つい癖で」

言いながら義孝はおれを挟んで穂波の反対側へと座った。

そんな事は気にせず小窓から外を見てみれば、空は茜色に染まっていた。割れているので風通しが非常に良い。

「随分長い間寝ていたようだな」

周りを見渡しても雪華がいないのは既に帰ってしまったからだろう。枕元に置かれた書置きを見れば「明日まで十分に休むこと。夕食用にお粥を作っておきました。お腹が空いたら食べてください」と書かれていた。

ボールペンを使って筆で書いたような文字を書けるのは雪華だけなので、この書置きは間違いない雪華のものだろう。台所のガスコンロの上を見れば小さな手持ち鍋が置かれていた。

様々な事を確認し終わると、ようやく体が食べ物を欲し始めたよ

うで、静かに腹の虫が鳴いた。

「お、起きたのなら丁度良いや。いくつか土産を持ってきたから、何が食いたい？ 用意するぞ？」

そう言いながら手に持っている袋から次々と土産とやらを出していく。

リンゴに桃に葡萄と、色取り取りの果物が豪勢に並べられた。

どれも瑞々しく、食欲が十分にあれば恐らく全部と言ってしまっただった。

「こんなもんだ。どれが良いか分からなかったから何となく見舞いっぽいものを選んできたぞ」

本当にその通りなのだろう、リンゴと桃は良いとしても葡萄は見事な巨峰であり、布団の上で食べるものではなかった。

「：リンゴを頼む」

「了解。包丁借りるぞ」

言うつと義孝は直ぐに立ち上がり、台所の棚から包丁を取り出すと直ぐに戻って目の前でリンゴの皮を剥き始めた。

「しかし、俺も聖が倒れるのは予想外だったな：白雪ちゃんの講義がそんなにハードだったのか？」

義孝の視線はリンゴではなく穂波の方に向かっていた。

この男にとつてこれくらいは何とも無いことであり、やろうと思えば本を読みながらでもリンゴ芸術を作ることが可能だ。

ただ、穂波には別段驚くことでもなかったそうで、普通にリンゴを乗せるためである皿と楊枝を用意していた。

視線が時々葡萄に向いているところから、穂波の好みは葡萄だったのかもしれない。今更変えるのも義孝に申し訳ないので今回は穂波に我慢してもらおう。

「いえ：話は日を跨ぐ前に終わらせて、後は少し復習をする程度に説明書を読むように言っただけです」

白雪に代わったようで、口調が丁寧になっていた。これまでに何度か入れ替わっているのをみて気付いたのだが、判断基準として目

の吊り具合で白雪と穂波を見分けることが出来ることがわかった。白雪は穂波に比べて僅かに目が吊りあがり、眉間に少し力が入っているので、注意して見れば直ぐに判別できそうだ。

白雪の答えに義孝は天井を見上げた。それは何か思い至ったような仕草だった。

「あゝ…もしかして聖はそれで完徹か？」

「…良く分かったな…」

「聖の性格を考えれば、な。出来るだけ後に残さないようにするのがお前だから、多分今日あたり完全に使えるように目指していたんだろ？」

見抜かれていたようだ。

「けど、機械音痴の聖のことだ。完全に扱いきれずに朝が来たんだろう？ メールや普通の電話ぐらいは出来るようになったけど、それ以上の操作は出来ないを見た」

その予想が正解だったのが嬉しかったのか、義孝の皮を剥くスピードが一気に上昇した。が、それも一瞬のことで、速度は直ぐに元通りになった。

「まあそれは置いといて…ただ、それだけで聖が倒れるとは思えないんだよな…他に何か心当たりは？」

納得できないといった顔をしながら、義孝は聞いてきた。

「一瞬話すかどうか迷ったが、『あの事』を話している義孝なら大丈夫だろうと思って口を開いた。

「…少し、あの事を思い出しただけだ…」

その言葉だけで、義孝は理解したように「あゝ…」といって皮むきの手を止めた。

既にリングは丸裸の状態で、皮は見事一本に繋がっていた。

「…成程…それなら倒れた理由としては十分だな…」

剥き終えたリングを手の平をまな板代わりにして十六等分にし、白雪の用意した皿に乗せて、三つにそれぞれ爪楊枝を刺した。

「すいません…あのこつて何ですか？」

白雪は俺達の会話に疑問を持ったようで、躊躇いがちに、静かにそう尋ねてきた。

「うん…俺から話すのも違う気がするからな…聖は大丈夫か？
義孝は剥いた皮を口に啜えながら聞いてきた。

恐らく気を使っているのだろう。

「無理だな。今の状態なら多分聞くだけでも駄目だ」

一度目は何とか耐えられたが、二度目も耐えられるとは限らない。しばらく精神的に休ませなければ、下手をするとおかしくなりかねない。

それほどまでに、あの事は悲惨だった。

未だにその呪縛に囚われている俺も問題だが、これだけは何か切っ掛けがなければ抜け出すことは出来ないだろう。

「…というわけで、今日のところは我慢してくれ。時期を見て話そうとは思うが…」

「…分かりました」

不承不承といった様子では有るが、白雪は頷いた。

さすがに義孝の真剣な表情を見たので黙らざるを得なかったのだろう。白雪は乗り出しかけた身を静かに座らせ、楊枝でリンゴを一切れ手に取った。

「いただきます」

「おう、召し上がれ…つつても皮を剥いて切って並べただけだな」

白雪が小さな口でリンゴを一口食べると、僅かな沈黙が訪れたが、それも直ぐに破られた。

「美味しいですね」

「なら良かった。俺の分はいいから、二人で食べてくれ」

「悪いな」

「何、気にするな。俺が勝手にやっているだけだ」

そう言つと義孝はポケットから例のメモ帳を取り出して、何やらページを探し始めた。

「ところで白雪ちゃんたちには好き嫌いとかはあるのか？」

「え？ どうして急に？」

「いや、今までは聖だけだったから土産もそんなに気を遣わなくて良かったけど、これからは穂波ちゃんたちの嫌いな物を持ってこないようにしたいからな」

「その言い方だと俺なら何でも良い、という風に聞こえるのだが？」

「間違えた。聖は何でも喜んで受け取ってくれたけど、穂波ちゃんたちもそうだとは限らないって事だ」

冗談交じりに俺が皮肉ると、義孝は笑いながら答えた。

白雪はというと、義孝の質問に対して真剣に考えているようで、右の人差し指で顎を押さえていた。

「私も穂波も特にありませんが…強いて言うならゲテモノが苦手です」

「さすがにそんなものを持つてくるほど俺は酷く無いぞ」

「とりあえず以前持ってきたナマコは止めて置け。俺だけだったから良かったもの…」

調理方法が分からず刺身にしてしまったことを思い出した。見た目の気持ち悪さは白雪達が見れば失神してもおかしくは無かっただろう。

調理後は義孝に教えられて中華料理に使われることを知ったが、食べてみればあまりお勧めできるものではないと確信した。

「まあそれは気をつけるわ…けど、そういう物以外は大丈夫ってことだな？ 魚が駄目とか、卵が駄目とかは無いだな？」

「はい。全くありませんね」

「よし、了解」

そう言うと義孝はメモをし始めた。と言っても書く内容は特に無かったのか、直ぐにペンが止まり、別のページに目を移していた。

「あ…ところでメモを見て思い出したんだが…いくつか気になっていたことを聞いても良いか、白雪ちゃん？」

思い出したように義孝が突然声をあげてそう言うと、白雪は何か

と思って下を向いていた顔を上げた。

「何でしょうか？」

言いながら二切れ目のリンゴへと手を伸ばす。が、そこで俺が一口も食べていないことに気付き、静かに手を引っ込めた。

ちなみに義孝は既にリンゴの皮を食べ終わり、いつの間に用意したのかコップに入った水を口にした。

「これは単純に俺が馬鹿なだけかもしれないから聞くけど、どうして白雪ちゃん・穂波ちゃん…他にもいるんだっけ？ …はわざわざ『一つの身体』に入っているのかが分からないんだが…」

飲み込むとしばらく間を空けて、義孝は自分の考えを口にした。

「俺からしてみれば、わざわざそんな面倒くさい事をしないで、一人に一つずつ身体を与えればいいと思うんだが…何か理由でもあるのか？」

言われてみれば俺も同じく不思議だと思った。

人格を複数一つの体に保持しては何かと支障もあるだろうし、まだ俺達の知らないリスクが存在するかもしれない。

また、事情を知らない人間が見れば危険人物の扱いを受ける可能性も無いとは言い切れないだろう。幸い、ここ・白水町ではそんな事をする人は殆どいないが…

僅かに白雪は考え込むと、気持ちを固めたのか、真っ直ぐに俺と義孝の目を見た。

「…少し話が長くなりますが…それでも良いですか？」

俺達は彼女の問いに、静かに頷いた。

Explanation

「それじゃあまずは未来について少し話すね」

穂波の足元には義孝の予備メモ帳とボールペンが置かれている。所々で図によって解説しないと混乱する部分もあるだろうということ、白雪が義孝に頼んで貰ったものだ。

ちなみに何故穂波が説明役かというところ、脳内会議で話し合った結果で、以前は白雪だったから今回は穂波が話したいと言い出したらしい。

「今の時代からどれだけの時間が経てば時間軸移動が出来るようになるかは、情報規制が敷かれているから言えないけど…とりあえず未来では過去に関してのみ移行する事が出来るのは大丈夫？」

確認であるう穂波の問いかけに俺と義孝は黙って頷いた。

「で、その未来についてなんだけど…実は『時間軸』にもう一つ『平行世界』の概念が加わっているんだよ。お父さんならこの辺りは分かるよね？」

言いながら穂波は二本に枝分かれする線をメモに書いた。

「ああ。確かそこに置いてある小説でそんなものを取り扱ったものがあったと思うが…」

「何だっけ、『If』って名前の小説じゃなかったか？」

「それだな。大分前から見かけなくなっただが…」

以前何となく思い出して読もうとしたのだが、部屋中を探しても見つからなくて断念したのだ。狭い部屋な上、基本物を外に持ち出さないのが部屋の中にあるはずなのだが…

「この前俺が炭酸飲料ぶちまけて全く読めなくなっただから、俺の家に隠しているんだ…」

以前急に畳が一枚だけ新しいものにならっていたのはそれが理由か。

そしてその後に出会った義孝の態度が微妙におかしかったのも納得

がいった。その時に持っていた空の着色料を大量に使った炭酸飲料のペットボトルを持っていたのも…

「…とりあえず義孝は後で締めておくとして…平行世界か」
隣から「おおぅ…」などと聞こえたが、今は無視だ。

平行世界とは、ある時点で別の行動をした自分が存在する世界、という概念で、近年では『Ifの世界』などと呼ばれている。

誰もが「あの時にああしていれば…」と思ったことがあるだろう。そのしなかつた行動を起こし、別の道を歩んでいる自分がいる世界を大まかに『平行世界』という。

「うん。それが、私たちが一つの体に複数の人格を宿している理由になるの」

「? どういうことだ?」

訳が分からず、思わず尋ねてしまった。

「今の段階ではお父さんの未来は殆ど確定していないの。その時代を狙って私は移行をしたんだけど…その条件が《他の平行世界の『お父さんの娘』全員が、同じ時代に来る》事だったの」

「…ああ、もしかして…」

義孝は確認するように俺に視線を移した。俺もその意味を理解して頷いた。

「誰か一人の娘だと、不公平…例えば聖の相手が一人に決まっている、なんて話をするかもしれないって事態が起こり得るからか?」

義孝は穂波に向かってそういった。これは俺も殆ど同じ考えだった。

義孝は普段の行動から、馬鹿者のように見られることが多いが、実際は文武両道の切れ者なのだ。ただ、普段は細かいことを気にしない性格と、競争意識の低さからその実力を十分に発揮する事が少ない。

今回は見事に的中していたのか、穂波は静かにうなずいた。

「一応並んでいる平行世界と連絡する技術も出来上がっていて、一つの未来だけから送ることは不公平だ、ということだ…」

言いながら穂波は二本ほどの平行に並んだ線に対し垂直な線を描いた。

二本の線との交差点の隣にそれぞれ穂波、白雪と丸をつけていた。

「……」

穂波の話はある程度理解できていた。

だが、頭の中で、何かが引っかかっていた。

その理由は全く分からず、もどかさだけが募っていった。

「でも、不確定な時代に多く送る事は、歪みを生みかねないから、妥協案として複数人格を用意された一つの体に纏めたの。おかげさまで、最初に鏡を見たときは本当にこれが自分なのか？　なんて思ったからね」

「そうなのか？　けどそれって大分不便じゃないか？」

そんな俺の考えを他所に、穂波と義孝は話を続けていた。

靄がかかったような気持ちだったが、今は穂波の話に集中する為に頭を振って先ほどまでの考えを振り払った。

「確かに最初は戸惑ったけど、慣れれば皆の欠点を補い合えるから意外と便利なんだよ。初めて浅海社に行くときは白雪ちゃんのおかげで近くまで行けたからね」

「あっはっはっは！　確かに、白雪ちゃんのほうがしっかりしているそうだからな！」

義孝の答えに穂波は少し恥ずかしそうに下を向いた。けれども、その表情は照れ笑いで何故か少し誇らしげだった。

「しかし、話を聞いていて不思議に思ったことがあるんだが……」

空いた間にすかさず俺は割り込んで疑問を口にした。

「今のところ俺は複数人格のうち、穂波と白雪しか知らないが、他にも人格が宿っているのか？」

「いるのならば、会いたい。」

そう思って、俺は自然と穂波を問い詰めるような口調になってしまった。

「うん。ただ、何でか他の子達は存在が薄い感じがするの」

「薄い？」

「そう。いるのは確実なんだけど、呼びかけても時々しか答えられないくらい、存在が希薄なの」

先ほど書かれた分岐点から更に点線が一本追加された。

「今の段階では。お父さんとの関係性が弱いからかもしれないけど、もしかしたら今後表にはつきり出てくるかもしれないね」

「…そうか。それなら無理に話す訳にもいかないな」

少し残念な気もするが、会えないと言うのなら静かに待つだけだ。

何故、会おうとしたのかは分からない。

何を話したい、というわけでもないのに、思わず尋ねてしまった。自分でも自分が、一瞬分からなくなったが、気持ちを切り替えるために少しあたりを見回してみた。

ふと、外を見てみれば、空は既に暗くなり始めていた。

涼しい風が小窓から吹き込み、僅かに髪を揺らして身体を冷やしていった。

「おっと、さすがに長居しすぎたか」

日が暮れたことに気付いた義孝は腕時計で時間を確認すると、腰を上げて真っ直ぐに玄関へと向かっていった。

去り際の動作は非常に素早く、立ち上がったから僅か十五秒ほどで既に帰りの支度ができていた。

「それじゃあ、俺はこれで失礼するけど、穂波ちゃんも聖が寝るまで見張っておいてくれ。そうしないと巡回をすとか言っただけ無理をし始めるぞ？」

「分かりました！」

元気良く頷く穂波に義孝は満足そうに頷き、ドアを開けた。

「…信用が無いな。さすがの俺も動く気力はもう無いぞ？」

実際、既に立ち上がる気力は殆どないので、今日はこの狭い部屋の中すらも歩けないだろう。かろうじて手は動かせるが、力は入らない。

「それでも、だ。少し体力が回復したぐらいで動こうとしたこともあるからな、お前は。用心に越したことは無いだろ？」

返す言葉が無く、つい黙ってしまった。

前科がある以上、反論が出来なくなってしまう、義孝に負けを認めざるを得なかった。

「分かったなら、今日は絶対安静だ。明日様子を見に来るから、その時に元気だったらいつも通り好きに行動しろ。良いな」

「…了解」

妥協案を渋々了解すると、義孝はもう言うことは無い、とでも思っただのだろう。『じゃあ明日』とだけ言って宵闇へと消えていった。ドアを開け放したままで。

「……」

「…風が入ってくるからもう閉めるね？」

「…ああ、頼む」

ドアを閉めた後、穂波はコンロの上に置かれた手鍋に気付き、それを軽く温めた俺の元に持ってきた。

「そういえば、雪華さんが『聖さんが起きたら食べさせてください』って言って…」

「ああ、このメモに書いてあったから知っている」

起きた時に枕元に置かれていたメモを穂波に見せる。

「丁度食欲が湧いたところだ」

「うん、分かった」

そういうと穂波は一緒に持ってきた茶碗に粥をよそい、レンゲを入れて俺に差し出した。

鰹節の出汁が軽く利いているため、香りが更に食欲を誘う。さすが長年氷城剣術道場の食事係を勤めていただけのことはある。疲れて食欲が無くなっている時でも食べられるように、と考えられた物である為、今の俺には丁度良かった。

これを完成させるために味見役になり、何度も食べさせられたことを何となく思い出してしまった。

五年ほど前のことでありながら頭の中にその時の様子が鮮明に蘇り、思わず苦笑してしまった。

「…いただきます」

思い出すのはそこまでにして、粥を口に運ぶ。

一口食べると、薄くも無く、濃くも無い、丁度良い塩加減が舌に感じられた。

味見役をしたときに『これは美味しい』と言った時の味であり、何となく心が温かくなった。そこでようやく、昼を食べていないことに体が気付いたのか、不満そうに腹の虫が鳴き始めた。

「あはは、おかわりはまだあるからね」

初春の夜。

浅海壮の一室は、今まで以上に温かかった。

外の気配に気付けなかったことが、この日最大の、俺の落ち度だった

翌朝。

俺は浅海壮近くにある広場で修練をしていた。

朝といえども日はまだ昇っておらず、あたりは未だに暗闇が覆っている。空気は寒々としており、動かして熱くなっている身体には針を刺すような寒さだった。

それでも修練を止めることはない。

虚空に向けて手刀・足刀を振るう。

実戦を頭の中で思い浮かべつつ。

視界に映る虚像はあの時の群集。

力不足で二人を見殺しにしてしまった、悪夢。

それを振り払うように。

それを薙ぎ払うように。

無我夢中に武を振るう。

「げああ！」

身体のパネ全体を使い、鋭い手刀の一撃を放つ。一瞬間違えば殺されるという場面を想定して、一切の手抜きはしない。

前方を攻撃すれば後方及び一番遠い側面を攻撃されると想定して回し蹴りを。ただし必要最低限の範囲だけに当たるように。

時には先を取られて後方に飛び退くこともする。

無駄な行動は死に繋がると思え。

不要な行動は死を生みだすと思え。

教わった言葉が常に頭の中を駆け巡る。

一挙手一動足全てに細心の注意を払い、虚空の敵を討つ。
噴き出る汗は容赦無く足元の草に降り注ぐ。

緊張感で体が縮こまらないように、常に心を奮い立たせる。

「シッ！」

そして最後。

頭の中の敵を全て倒し終え、ようやく息を吸う。

自分でも珍しいと思うほど息が荒くなっており、振り切った手刀は心なし震えているようにも感じた。

寒さの所為か、恐怖の所為か。

恐らくは後者だろう。

その震えを少しでも押さえようと、一つ、二つと深呼吸をして気持ち落ち着かせる。

肺いっぱい空気満ちていく感覚は、何度味わっても飽きるこ
とが無い。生きていることを何となく感じる事が出来るためだ。

だが、やはり昨日蘇った記憶がいつものように体が機能する事を許さない。

これは、もう二度と、二人が味わえない感覚だ

そう思うと、無意識的に呼吸が浅くなるが、それでも身体は不足している酸素を少しでも多く取り入れようと呼吸の数が多くなってしまう。

ようやく息が整った、というところでここには居ない筈の二つの気配に気付くことができた。

修練中は殺気と害意にのみ反応するように神経を研ぎ澄ましている
ので、この穏やかな二人の気配には反応できなかったようだ。

「えっと…お疲れ様、聖君」

「お見事でした。タオルです」

いつの間にもいたのだろうか、そこには稲穂と雪華がシートの上に座っていたようで、修練が終わったとみると同時に立ち上がり、俺の元へ色々と持ってきていた。

雪華から渡されたタオルを思わず受け取り、稲穂がおずおずと渡してきたコップも体が欲していたのだろう、ほぼ条件反射で一気に飲み干してしまった。

そこでようやく意識が普段の状態に戻り、疑問がいくつも浮かび始めた。

「…稲穂と雪華か。どうしたんだ、こんな朝早くから…それにどう

してここを？」

稲穂と雪華に対してはここで修練に励んでいることは隠しているし、近くにあるとはいえ、知る人は殆どいない場所なのだが…

「今朝様子を見に行ったら聖さんが部屋にいなかったの…」

「義孝君に聞いたらここにいてもいなくても教えてくれたから来てみたの」

「…あの野郎…」

「黙っていた場所を聞いてしまったのは悪いとは思っています。ですが、昨日あんなことがあった以上気にせずにはいらなかった、ということも覚えておいてください」

「そ、それで、聖君の体調は大丈夫なの？ 昨日倒れたって聞いたから心配したけど…」

俺の怒りを感じ取ったのか、稲穂は無理矢理な感じが否めないが、話を逸らそうとした。

「ああ、さっきの動きを見れば分かる通り、殆ど万全の状態だ」

先ほど受け取ったタオルで顔を拭くと、それだけで水浸しになってしまった。

「良かった。これで聖君に何かあったら申し訳なかったからね」

「気にしすぎだとは思うが…それに原因は昨日の手伝いじゃないから安心しろ」

そう言うとうやく稲穂は安心したように深く息を吐いた。恐らく自分に責任があるのではないかと思っていたのだろう。

稲穂は面倒見の良い方であり、場を盛り上げるムードメーカー的存在であるが、同時に人の事を気に掛けすぎるところもある。

昨日俺が倒れたことも、寝不足を察知していながらも止める事が出来なかったと考えていたのかもしれない。

彼女が常に明るく振舞っているのは、少しでも多くの人に笑顔でいて欲しいから、という理由であり彼女なりの周囲に対する気遣いである。決して能天気というわけでないことを、俺は知っている。

そのため、ようやく見せた稲穂の笑顔に俺は少なからず安心でき

た。

「でも聖君の練習ってやつぱり凄いなだね。武術の分からない私でも、思わず魅入っちゃったよ」

稲穂は先ほどの俺の動きを真似てみてはいたが、さすがにこれは経験と熟練度の差だろう、最初の動きで見事に身体を振り回されて倒れた。

「さすがにあの動きは稲穂には無理だろう。俺でも習得には一年かかったんだからな…ほら、立てるか？」

倒れた稲穂に手を差し伸べると、稲穂は迷う事無くその手を握って反動で立ち上がった。

「ごめんね、聖君…だけど…気のせいだったら良いんだけど…」
体勢を立て直して稲穂は再び心配そうにこちらを見上げてきた。

「聖君、いつもよりなんだか辛そうな顔をしていたよ？」

稲穂の指摘に俺は少なからず驚きを覚えた。

「はい、私も稲穂さんに言われて何となく気に掛けてみたらそういう風を感じられました。最初はこれだけ厳しい修練だから、と思っ
ていましたか…」

「練習が辛いつて言うより…なんだろう、恐い事を思い出して…それを振り払っているような…そんな感じだったよ？」

「……」

そう、人一倍他人を気に掛ける稲穂は、心情の機微に鋭く、隠しているも直ぐに見抜いてしまう感受性を持っている。

時には本人すら気付いていない心の声も感じ取れるようで、光陵高校では他人の悩みを聞いたりしている。それによって心が軽くなった、という話も少なくない。それほどまでに、稲穂の心情察知の能力は優れている。

「確か…昨日聖さんはそんな事を言っていましたね」

「聖君、私たちじゃ力になれないかもしれないけど、聞くぐらいは出来るから…」

「……」

稲穂達の心遣いは正直ありがたかった。

だが、それでもこの話はまだ話すべきではないだろう。

「ありがとう、本当に辛くなったら話すかもしれないから、その時は聞いてくれ」

「…うん、分かった」

稲穂はまだ心配といった顔をしていたが、一応は納得してくれたようで、そのことに関しては何れ以上何も言わなかった。

「ところで聖さんに一つ聞きたいのですが…」

話が纏まったところで、雪華が半ば怒り気味で話しかけてきた。

何かと思ってみて見ると、雪華の後ろから穂波が現れたのだった。雪華は女性にしては背の高い方である為、女子の平均程度の身長である穂波を見事に雪華の影に隠すことができるようだ。

穂波は『ごめんなさい！』と今にも言い出しそうな申し訳無さそうな表情を浮かべながら雪華たちと俺の間で視線を行き来させていたが、最終的に下を向いてしまった。

何となく嫌な予感を抱いて雪華のほうを見てみると、予想通り無表情が俺をじっと見つめていた。

「今朝会ったときに、聖さんを『お父さん』と呼んでいたのですが…これについて詳しい説明を出来ますか？」

その言葉に『拒否』の選択肢は存在しなかった。

知られてしまった以上は説明しなければ今後になにかと問題があるだろう。

稲穂も同じ意見のようで、雪華に並んで同じ様な視線をぶつけてきた。

「…参ったな…」

取りあえず俺は知っている限りの情報を雪華と稲穂に話すことにした。

話し終えるまでおよそ三十分。これほどまでに三十分を長いと感じたのは初めてだった。

二人は思った以上に静かに聴いていてくれたために説明はかなりスムーズに終わることが出来た。最初の雰囲気と一昨日の説明時のこともあったことから追い詰められる事もあるのではないかと思っていたので正直助かったと思っっている。

一応穂波と白雪の事は『未来から来た娘』と言う事と、『目的があつてこの時代に来た』ということだけは話した。目的に関しては白雪の口から直接話してもらつことにした。

最初は驚きつつも否定をしていた二人だが、白雪が『俺の死亡』について話した時点で一瞬にして二人は態度を改めていた。

「…白雪さん、一つ確認してもいいですか？」

雪華は緊張した面立ちで、真つ直ぐに白雪の瞳を見つめていた。

「…聖さんの娘ということは…お相手は？」

その発言で雪華の隣にいた稲穂も僅かに反応した。

「…そういえば今まで聞いてなかつたな…」

そう言つと稲穂と雪華は鋭くこちらを睨んできた。

そのあまりの鋭さに思わず目を逸らしてしまうほどだ。

便利屋を辞めるように言われていたことですから頭から抜け落ちていたのだが…弁解の余地は無さそうだった。

「…今回の平行世界に関しては未確定です。ただ、私たちの母親については…」

少し躊躇いの間が生まれたが、それも直ぐに去っていった。

「私、神風白雪の母親は、雪華さんです」

白雪が告白すると直ぐに雰囲気が変わった。

「そして今度はきちんと娘として挨拶するね。私は神風穂波で、お母さんは稲穂つて名前だよ。他にも幾つか人格があるけど、私たち以外はまだ分からないんだ…」

穂波達の言葉で話を聞いていた二人は見事に固まっていた。

「えつと…私が穂波ちゃんのお母さんつて事は、お父さんは…えつと…」

稲穂は見事に混乱しており、雪華は本当に聞こえない程度に何か

を呟いていた。仕方ないことだろう、いきなり別の未来では自分が母親になつていることを突きつけられて普通にしていられる人間はあまりいないだろう。混乱の極みである稲穂は自分と穂波、そして俺の順に何度も指を指して確認していた。対して雪華は自分を言い聞かせるように何かを呟いていたが、小声だった為に全く聞こえなかった。

「…まあ、そういうことらしい。俺も初めて知ったが…」

ただ、白雪の口振りから、それは他の平行世界のことであつてこの世界のことではない、という意味も含まれているのだろう。

それをようやく理解したのか、先ほどまでトリップしていた二人はようやく現実世界に戻つてきた。何処に行つていたか、までは分からないが。

「で、ですが、聖さんが亡くなる、というのはどういう事ですか？」

「そ、そうだ！ 聖君はそんな危ないことをしてないし…！」

戻つてきた二人はそのことが信じきれないといった様子で白雪に對して問い詰めていた。

「では、母さん達は父さんが白水町に紛れ込んだ犯罪者を人知れず捕らえていたことは知っていますか？」

「…え？」

「…何？」

その場にいる白雪以外の、そして俺までもその発言には言葉を失つた。

二人は本当にそんな事をしていたのかといった、信じ切れていないような表情を、俺は思わず訝しげな表情を白雪に向けていた。が、白雪はそんな事を一切気にせずに続けた。

「更に言えば、今まで捕まえた犯罪者の中には凶悪な殺人犯も含まれていることも知っていますか？」

白雪の追撃に話を聞いていた二人は完全に答えられなくなつてしまった。最初は二人で顔を合わせたりしていたが、互いに知らない事を確認すると今度は俺に視線を向けた。事実かどうかを知りたい

のだろう。

「…それは何処で知ったことだ？」

俺は仕方なくその事実を認めることにした。この二人には嘘を吐きたくないという気持ちからの白状だった。

ただ、このことを知っているのは協力を仰いだ義孝くらいで、更には厳しく他言無用と言いつけさせているのでどこかから情報が漏れるとは考えにくい。

「仮にも世界機関に認められた人間ですから、これくらいの秘密情報が入手できますよ？」

俺の疑問を感じ取ったのか、白雪は僅かに自慢げに俺のほうへと一度顔を向けた。が、直ぐに稲穂達に向き直った。

「このように父さんが今までやってきた事が危険ではないと言いつけれますか、母さん達は？」

「うっ…」

娘の問い掛けに雪華は普段聞かないような声をあげていた。対して稲穂は先ほどまでのたじろぎが嘘のように落ち着いていた。

「…白雪ちゃん、で良いんだよね？」

「稲穂さん？」

先ほどとは異なつた雰囲気を感じ始めた稲穂にさすがの白雪も違和感を覚えざるを得なかつたようだ。

「聖君の子供だつて言つのなら、お父さんの聖君の気持ちも分かっているはずだよな？ 聖君はただ、自分より誰かを優先する人だから、危険なことも自らやっているだけだと思つんだ。誰かが傷つくぐらいなら自分が傷を負う…白雪ちゃんがこの時代に来て何日かは分からないけど、それでも少しは聖君の何かを感じてはいるんだよね？」

今度は白雪が黙ってしまった。

稲穂は的確に白雪の心情を感知して、宥めるように、静かに話しかけた。

「今までやってきた危ないことも、多分街の皆を不安にさせないよ

うにする為黙っていたんだと思うよ。そうだよね？」

確認するために稲穂は俺のほうへと顔だけを向けた。僅かに首を傾げてはいるが、その口調は確信に近い何かを持っていた。

「…そこは想像に任せる」

「正解みたいだね」

濁して答えたつもりだったが、稲穂は俺の反応をみて確信していた。稲穂は少し笑うと再び白雪と向き直った。

「私もこの街が好きだから何となく聖君の気持ちは分かるよ。だから私は聖君に無理に便利屋を辞めるとは言えないね。実際私は何度も聖君に助けられたから…」

「……」

完全に黙り込んでしまった白雪の反応を少しずつ窺いながら稲穂は話を続けていった。

だが白雪の我慢も限界を超えたようで、稲穂が続きを話そうとしたところで勢い良く立ち上がった。

その表情は怒りを抑え切れないようにも見えたが、苦しさには耐え切れないようにも見えた。

「…母さん達に私たちの気持ちは分かりません…」

俯きがちに呟いた白雪の言葉は、おそらく今までの言葉の中で何よりも怒りを含んでいた。

「…白雪？」

声をかけると白雪は顔を上げたが、その表情は今にも泣き出しそうだった。

「母さん達には父さんとの思い出があるでしょう！でも私たちに父さんとの思い出は殆ど無いんです！」

白雪は涙を溜めながら訴えるように言い放った。

これにはさすがの稲穂も読み取れなかったのか、非常に困惑していた。

「白雪、それは…」

どうということだ、と聞く間もなく白雪は広場から走り去ってしまった。

った。その背中には既に見えなくなっていた。

残された俺達はしばらく互いに口を開かなかった。開けなかった。だが、それを破ったのは雪華だった。

「聖さん」

今までとは違い、穏やかに尋ねられた。

「聖さんは白雪…さんたちとは今までどの様な会話をしていましたか？」

呼び方が不自然なのは未来の娘をどう呼べばいいのか一瞬分からなかったからだろう。当然だ、いきなり自分の未来の娘だといわれれば呼び方一つで混乱してもおかしくない。

「…便利屋を辞めるべき、位だな…」

思い返してみると印象的な会話は本当にそれ位しかなかった。

「つまりは互いに殆ど、まともに話し合っていない状態なのですね？」

言われてようやくそのことに気がついた。確かに稲穂、白雪が来ても俺達はどこか余所余所しい会話しかしていなかった。

「…白雪ちゃん…やっぱりどこか寂しそうだったよ？」

稲穂は白雪達の去っていた方向を少し悲しそうに見つめながらそう言った。

言われて今まで穂波達への対応は父親失格だったことを痛感した。自分のことしか考えなかったが為に、本来大切にすべき者を傷つけてしまった。

後悔しても時既に遅し。

「互いに意見をぶつけ合うだけでは、相手のことは全く分かりません…少し落ち着いたらもう一度聖さんと穂波さんたちと話し合ってみてはどうですか？」

「…分かった、夕方辺りにもう一度話し合ってみる…多分部屋には戻ってくるだろうから、落ち着くまでは少し俺のほうでも色々考えみることにする」

「その時はもう少し柔らかく対応してね。聖君は少し頑固すぎると

ころがあるからね」

「今回のことで痛いほどよく分かった…」

ようやく朝日が東から昇り、白水町をゆっくりと照らし出していた。だがそれとは対称的に俺の心は霧がかかったような状態だった。

白雪達が広場から走り去った後、取りあえず部屋以外に居ないかと探してみることにした。雪華と稲穂達も最初は探すのに協力をしていたくれたが、店や道場の都合で戻らなければならなくなり、昼を区切り目にしてわかれた。

自分自身でも白水町を色々歩き回って探してみたが、やはり見つからないことから部屋に戻っているのかもしれない。聞き込みもしているのではば間違いないだろう。

最後に探した場所は商店街で、少し多い人混みの中にはそれらしき影は無かった。

あれからしばらくの間町中を探した為、昇っていたと思っていた日は既に西へと傾き始めていた。

夕方だということもあってか、商店街は客の呼び込みの声が飛び交い、主婦（及び仕事帰りの人々）はその声に右に左にと動き回り、ある程度往復をし終わると袋を片手に、時には両手いっぱいを持ちながら家路へと着いていった。

中には空いている手で子供の手を引きながら帰る人も、少なからずいた。

子供は小さな袋を片手に持っているところ、ささやかな手伝いをしているのだろう。

これが本来の親と子の表情かもしれない。

そう思うと余計に部屋に戻り、白雪たちと話すことを躊躇ってしまふ。正確にはどう接していけばよいか分からない、というのが正解だろう。

「…次に白雪と稲穂に会ったら何を話せば良いのだろうか…」

去り際の表情からして普通に話すだけでは解決できそうにも無かったため、何か案がないかという意味も含めて商店街を歩いている。出来れば早いうちに白雪と稲穂達との関係を修復しておきたいと

は思っているが、残念ながらこのような場合どう対応すれば良いか分からず、俺の様子は端から見れば歩き回るといふよりは彷徨うという表現の方が当てはまるかもしれない。

「ありゃ？ 聖じゃねえか。どうした、そんなしょっぱい顔しやがって？」

小さく唸りながら歩いていると、それを見かねたのか大将が威勢良く声をかけてきた。

声をかけてきた大将は、接客途中の主婦に対して「悪い、ちょっと」とだけ言って店を離れこちらに歩み寄ってきた。

ある程度近づくと大将は俺の顔を見て手を上げて挨拶すると何かを探すように俺の周りを見た。

「今日はあの嬢ちゃんを連れていないのか？」

「どうやら探していたのは穂波だったらしい。」

「ああ、少し、な……」

事情を話そうかどうか悩んだが、あまり心配をさせたくない為に濁すように答えた。

「そうか、今日来てくれりゃあ少しサービスしてやるうかと思っただのよ。一昨日出来なかつた分を用意できたのにな」

大将はそう言っただけ胡麻塩頭を乱暴に搔いた。

「悪かつたな、穂波をつれてこられなくて」

「いや、良いんだが…出来る限り早く来てくれると助かるんだがな…やっぱり生物だからそう長く日持ちしない…」

「あんた！ 何やってるんだい！？ この忙しい時に…って聖君かい？」

大将の言葉を遮って店の奥から恰幅の良い女性が現れた。化粧を一切施すことなくすっぴんで魚を売る大将の奥さんはある意味魚英（大将の店の名前）の看板女性だ。美人かどうかの話はここでは置いておく。

大将に負けず劣らずの音量だが、大将は怒鳴られた途端に身体をすくませ、恐る恐る振り返っておばさんのほうへ見た。

だがおばさんは話し相手が俺だと分かると直ぐに声音が柔らかくなった。そしてその表情を見た大将も身体のこわばりが目に見えて抜けていった。

「こんにちは」

「ああ、こんにちは！ 聖君がここに来たって事は、うちの旦那がまた何かやらかしたのかい？」

「失礼な奴だな。それだと俺がまるで何度も悪いことをやってるみたいだろ」

「實際その通りじゃないのかい？ 一昨日の歓迎会であんたがたんぽぽ持っていこうとした話は聞いているよ。止めてくれたから良かったけど、実際にやったら迷惑以外の何ものでもなかったでしょ！」

収まった怒りを再び起こしてしまったようで、大将は見事に言葉をなくしてしまった。

「いや、嫌がらせではないからこつちも気にしていないが…」

「そう言っただけで甘やかすのはこの人には良くないから、聖君も庇わなくて良いんだよ！ それじゃあ話し終わったら直ぐに仕事に戻るんだよ！」

おばさんは既に聞く耳を持たないようで、言うだけの事を言うと店先へと戻り接客をし始めた。先ほどの怒りなど無かったように、お客と談笑をしているところはやはりさすがだと思う。

嵐が去ったことに安堵しつつも、この後が怖いといった微妙な表情をしながら、大将は深く息を吐いた。

「はあ…」

「…ご愁傷様だな」

「違いねえ…しっかし、あいつを怒らせちゃったのは失敗だったな。後で何か甘いものでも用意しておくか…」

大将はそう言っておばさんに見つかからないように俺を盾にして、隣の青果店でイチゴを一パック買い、裏口から届けるように頼んでいた。

「…なんであれを買ったんだ？」

戻ってきた大将に対し、素朴な疑問をぶつけた。

「ん？ ああ、いや。あれはあいつの好物で、少しでも怒りを治め
てから話さないと落ち着いて話を出来ないからな……」

その言葉を聞いて、一つ妙案が浮かんだ。

今まで穂波達と過ごしてきた記憶の片隅に残っていた、一つの情
報を利用してみることにする。

「悪かったな、迷惑をかけて。明日辺りには穂波をつれてくるから、
そのときにでも歓迎の品をやってくれ」

「ん…？ おう、合点だ！」

俺の言葉を聞いて先ほどまでしぼんだ風船のような覇気の無かつ
た大将は、見事に勢いを取り戻し、商店街の一角に響くほどの音量
になっていた。

大将に別れの言葉を告げてから俺は隣の青果店である物を買ひ、
浅海壮へと向かった。

ある物とは葡萄だ。

倒れた際に義孝が持ってきた見舞品の中で、白雪が最も食べたそ
うにしていたものであることを思い出して、一房買ったのだ。

見舞いの時の物は義孝が持って帰ってしまったので残っていない。
理由はおそらく雪華の作った粥のことを知っていたからだろう。見
舞い品は俺の食欲を戻す為だけに持ってきたのかもしれない。

そんな事を考えながら浅海壮に戻ると、穂波の部屋に明かりが灯
っていた。

辺りは徐々に暗くなり始めていたので、点灯しているかどうかは
直ぐに分かった。

部屋の前まで行き、一つ呼吸をしてからドアを開ける。

「白雪、少し話したいことが……」

そう言いかけたところで異変に気付いたが、そうしたところで意
味は全く無かった。

部屋には人影一つ無かったからだ。

「…白雪…？」

訳が分からず体の力が抜け、手にしていた袋を落としてしまったがそんな事はどうでもよかった。

浅海壮には押し入れなんてものは存在せず、店子の私物は大抵部屋の隅にまとめて置かれる。そして初めて会った時に穂波たちが持っていたポストンバックは、口を開いたまま置かれていた。

…家出ではない…本能的ではあるが俺の直感はそのう告げていた。更に良く見てみれば畳の一部が傷ついており、壁には僅かに凹みが見えた。部屋は定期的に畳の張替えをしたり、壁の凹みを埋めたりして、もつと言えば三月上旬に新しい店子を迎えられるようにしたばかりだった。

すると背後から風の流れを感じ、振り返って見るとそこには見事に小窓が割られ、大の大人一人は通れそうな穴が開いていた。窓ガラスの破片は部屋の中に飛び散っている。

俺の部屋同様に割られていた為、外から見ても直ぐに違和感に気付くことが出来なかった。

これらが何を意味するかというと…

「…誘拐か！」

そう思った矢先に、ポストンバックが奇妙な振動を起こし始めた。周期的に起こる振動が起こり、静かな部屋に響き渡った。

「……………」

バックを覗き込むと先日白雪の携帯電話講座で使われた電話がランプの点灯と共に震えていた。

本来ならば出るべきではないのだが、胸をよぎる不安感が募り、思わず通話のボタンを押して機器を耳に当てていた。

『白雪様、定期連絡には迅速に対応して…』

「…誰だ？」

突然受話器の向こうから聞こえた女性の声に対し、俺は怒りを隠す事無く問いかけた。声の感じから想像するに、若い女性であろう。女性は相手が自分の話したい相手とは違つたと悟ったのか、僅かに間を空けた後、静かに口を開いた。

「失礼、貴方は？」

「…神風聖。便利屋だ」

口ぶりから穂波たちがいないということは知らなかったようなので正直に答えた。

すると数秒の沈黙の後、女性は思い出したかの様に「ああ…」と言った。

「大変失礼しました。貴方がターゲットである神風様でしたか？」

「…ターゲットだと？」

聞きなれない単語を復唱すると、女性は淡々とした口調で「ええ」と答え、静かに続けた。

「白雪様からお話を伺っていませんか？」

「俺の死を回避するという意味合いの話だったら聴いているな」

「それに関しては何処まで伺っているかご確認してもよろしいでしょうか？」

焦る気持ちを抑えつつ穂波と白雪から聞いた話を出来る限り正確に話し、電話の女性について尋ねようとしたところで俺の携帯が着信音を鳴らしながら震えた。

「…どうぞ」

音が女性にも聞こえたのだろう、出ても構わないという答えをされたのでポケットから携帯を取り出した。

液晶に移された番号の羅列は見たことがないもので、恐る恐る通話ボタンを押して出た。

「…久しぶりだな、神風い！？」

するとそれを待ちかねていたかのように粘つくような、聞くだけで不快になる男の声が聞こえた。一瞬耳から機器を離し、思わず終話ボタンを押してしまいそうになったが、かろうじて堪えて再び機器を耳に当てる。

「…悪いが、名前が分からなければ思い出せないな。聞いても良いか？」

少し人を小ばかにしたような反応が俺の何かを逆なですが、そ

んな事をお構い無しに男の声は愉快そうに答えた。

『ひでえ話だなあ… つつてもお前に取っちゃ俺は大した奴じゃなかったんだろつよ… 』しかし、折角捕まえた凶悪犯の声を忘れられるとはなあ… 』

そこでようやく思い当たる人間の名前が頭に浮かんだ。

その男のした事も同時に脳裏に蘇り、背筋が凍るような感覚に襲われる。

「……滋賀洞爺か！」

『あつたりい！ 覚えていてくれて光栄だなあ、おい！』

滋賀洞爺。

三年前に世間を騒がした誘拐殺人犯で、少年少女を誘拐し、身代金を請求してはその子供の死体を親に送り返すという非人道的犯罪を起こした男だった。

それだけの行為をしながらも証拠を巧妙に隠していたために、捜査も難航していた。

幸い二度目の犯行を起こす前に俺が捕らえた為、それ以上の悲劇を起こさずに済んだ。

記憶が確かならこの男は未だ留置所に拘束されているはずなのだが…

『不思議そうに思っつていそうだから答えてやると、お前に何か恩返しをしたくてわざわざ檻から抜け出してきてやっつたぜ？』

「要は脱走して俺に報復しに来た、ということだな」

『せいかい！ かはははは！』

「…それで、その有名な誘拐殺人犯が俺に何の用だ？」

嫌な予感を感じつつも努めて静かに滋賀に問いかける。その反応に大分ご満悦なのか、滋賀は楽しそうに、侵しそうに笑っていた。

『おやおや、そんな反応をしているのかね？ お前の娘の命はこっちが預かっているつーのによお？』

その言葉に頭の何かが弾けそうになるが、ここで怒りに飲まれてはまずいと判断して拳を強く握って耐えた。

「…どういうことだ？」

自分でも声が震えていることがよく分かった。

それが怒りなのか、恐怖なのか、俺には分からなかったが、滋賀はそれを恐怖と判断したのだろう、声に徐々にではあるが歓喜の色が滲み始めていた。

『おいおいおい、俺を捕まえた神風さんならこれだけ言えば分かるだろう？ あんたの娘を誘拐したのは俺だってー事をよお？』

「予想はしていたが…」

『認めたくは無いつてか！ なら現実を思い知らせてやんよ！』

滋賀はそう言つと三秒ほど間を空けた。すると機器の向こうから聞きなれた声が聞こえた。

『…っは！ お、お父さん！』

「穂波！？ 無事か！」

『おゝっと！ お話はこれだけだぜ！ これ以上話されて俺が不利になるといけねえからなあ！』

「滋賀あ！」

『まあ、そう怒れつて！ 俺を出し抜いたテメエのそんな声が聞けて俺は満足だぜえ！？』

「ならもう十分だろう！」

『そういう訳にもいかねえよ。人間つーのは満足したら次の満足を求めるもんなんだよ。次はどうしようかねえ！ テメエの絶望に満ちた声を娘の悲鳴と聞くのも乙かもしれねえなあ！』

怒りのあまり指が折れそうなほど強く拳を握っていた。拳をこの男にぶつけ様にもこの男は手の届く場所にいない。それが更に俺の怒りを増幅させた。

『それじゃあここで失礼するぜ。次に話すのはおそらく目的地についてからだな。楽しみに待っているよ〜！？』

「！ 待て…！」

呼び止めるが当然応じる訳も無く、滋賀の笑い声が徐々に遠くなくなっていく。

切られると思った最後の瞬間…

『助けて、お父さん!』

最後に通話を切られる寸前に、穂波の助けを求める声が聞こえた。次に機器から聞こえたのは無情で淡白な電子音だった。

「…畜生!」

白雪達が走り去ってから直ぐに見つけられなかった後悔が一気に襲ってきた。

拳を握ろうが、齒軋りしようが、悪態をつこうが、意味が無いことだった。

『お怒りのところ申し訳ありませんが…』

そこでようやく白雪の機器で女性と会話をしていたことを思い出した。

「…なんだ?」

『白雪様たちは何らかの事件に巻き込まれたのでしょうか?』

「…その通りだ」

先ほどと変わらない女性の態度で更に苛立ちを覚えながらも、堪えながら答えた。更にはその男の危険性も話したが、それでも女性の反応は淡々としたものだった。

『成程…誘拐ですか。ですが、貴方が無理をして彼女達を助けるのは止めてください』

「…何だと?」

『白雪様と穂波様も話していたように、私たちの目的はあくまで《神風聖の死を回避する》ことです。今回無理をして死を早めてしまつては目的を達成できないので…』

「ふざけるな! 誰かが助けを求めているのに無視できるわけが…!」

『今彼女達を見捨て貴方を犠牲にする事で何十、何百…いえ、何万人と救えるはずの命が救えなくなりますが…それでもよろしいのですか?』

「それでもだ！ 目の前の命一つ救えないで何万人を救うだ…？
何であなたはそんな事を事も無げに言うことが出来るんだ！？」
『絶対多数の最善を選んでいるだけです。それも彼女達は承知の上
です。彼女達も最後に昔とはいえ父親に会えたのだから本望でしょ
う。便利屋も…』

「…待て…最後とは…どういうことだ…？」

聞き捨てなら無い単語が耳に入ったので、女性の話を無理矢理中
断して尋ねていた。

…最後…？

『聞いていませんでしたか？ 例え『貴方が生き延びる世界』が新
たに発生してもそこに彼女達の存在があるとは限りません。更に言
えば未来を変えることが出来てもそれが影響するのは今貴方がいる
世界だけなので、彼女達が元の世界に戻ってもそこで貴方が生き延
びる可能性は全くと言っていいほどありません』

語調を全く変えない女性の話は、衝撃を与えるには十分な威力だ
った。

「…俺の死を止める為に、別の世界なんかの為に、穂波達にそんな
任務を与えたというのか！」

『勘違いしないでください。彼女達は全員、自ら志願してきたとい
うことだけは真実だということを誓います』

「……………なん…だと…………？」

『彼女達がそちらの時代に行こうとした理由を記録したデータがあ
りますので、そちらを証拠として流します。それで判断してくださ
い。賢明な判断を…』

それだけ言う通話は途切れた。

しばらく無音の世界が続いたが、それも握っていた穂波達の電話
によって破られる。

『メール受信』の文字が浮かび上がり、音をたてて震えた。

受信画面を開くと、何通かのメールが『送信者不明』で届いてい
た。

タイトル名はそれぞれ順番に『送信した内容について』と四つの『無題』だった。

「……………」
一番上になっている「送信した内容について」は先ほどの女性のものだろう。開くと会話同様、淡々とした説明が簡潔に纏められていた。

『貴方の娘さんが、移行以前に記した志願理由より抜粋。一字一句修正なし』

「……………」

画面の『次へ』を押して、書かれた物を見る。

その内容に、思わず声をあげそうになった。

『誰よりも優しいお父さんに、人並みの、平穏な人生を送って欲しい。私がそこにいなくても構わない』

…同様に『次へ』を押す。

『父さんの娘として生まれてきたこの命は、私の誇りです…それだけを伝えたくて、志願しました』

『父にもう一度会いたくて』

『叶うのならば、もう一度パパの娘として過ごしたい』

「……………」

どれもこれも、短い文でありながら彼女達の心を良く現していた。…これが本当だというのなら、穂波も白雪もそしてまだ見ぬ娘達も、何をやっても戻ることの無い父親に、俺に会いたい一心でこの時代に来たということだ。

心が痛かった。

胸が苦しくなった。

娘達の心を露知らず、父親として何一つ彼女達に出来なかったことを、心底悔やんだ。

怒りとは全く違った何かで、拳を振るいたくなった。

彼女達に、娘達に、何も出来ずに終わってしまうというのか…？

「…いや…」

諦めるにはまだ早い。

今はまだ、穂波達は捕まっているだけで、希望はある。助けられる可能性が、ある。

ならば、俺も生き残り、穂波たちも助ける、最善の道を見つけ出す。

「俺はもう、二度と家族を死なせはしない……！」

俺は電話に記録されている、とある番号を選び、繋げた。

会話中に携帯電話の着信に気付けたのは幸運だった。

ポケットに入れていた為に振動が直接身体に伝わり、何かと思いつつも素早くそれを抜き出し相手を確認する。

そこに写っていた名前は予想外も予想外、神凧聖の名前だった。確認すると直ぐに通話ボタンを押して機器を耳に当てる。

「おう、聖か？ もう体調は大丈夫なのか？ お前から連絡が来るとは思ってもよらなかったが…」

『…義孝、折り入って一つ頼みがある』

ふざけ気味に出てみたが返って来たのは今までに無いほど切羽詰った聖の声だった。

今まで…と言っても二年間の短い付き合いだが、それでもこれほどまでに緊迫した様子の聖は片手で数え切れるほどである。

当然、白水町に潜入した凶悪犯捕縛の協力要請の時だ。

しかし、今回の雰囲気はそれ以上に危機が迫っているようにも感じた。

その様子に口調を抑えて静かに尋ねる。

「…珍しいな、本当に。お前が俺に頼み事なんて…」

『単刀直入に言う。穂波を…白雪を助ける為に、手を貸してくれ』

「…詳しい内容を話してくれ」

緊迫した空気が機器越しにも痛いほど伝わってきた為に無意識的に背筋が伸びたのだろう、視線が少し高くなった。

聖から内容を聞くのに三十秒ほどかかったが、要点だけを纏められていたので、頭にすんなりと入っていた。

話を聞きながらも自分が何をすべきかは、頭の中で固まっていた。「成程。それなら確かに俺の出番だ」

話を聞き終わった頃には俺の身体は熱に満ちていた。

やるべき事は既に決まった。後はそれを実行するだけだ。

『図々しい事は分かっている、それでも…』

「おっと、それ以上は言わなくていい」

謝ろうとする聖の言葉を無理矢理中断させる。

頼る術を全くと言っていいほど知らないこの男には、この言葉でいつも黙らせる。

「俺が好きで、勝手にやるだけだ。お前は悩みを勝手に打ち明けただけだ、いいな？ 最善の結果が出るように全力は尽くす」

『…恩に着る』

そんな事は言わなくてもいい。

お前のお蔭で、俺達がどれだけ助けられたか、こいつは露ほども知らないだろう。

だから、お前が助けを求めれば、俺は何があるうと、お前の支えになるつもりだ。

そしてそれは、俺だけではないことを、証明してやろう。

「…両部、今の話を聞いていたな？」

同じ部屋で眼前に座っている初老の男・両部に問いかける。

白黒混じった灰色の髪は短くも全て立ち上がっており、皺を持ちながらもしっかりとした体格を持った男は、そこにいるだけでも十分に威圧的だった。

「はい、若のご友人がお困りの様子で…」

壮年らしい厳しさのある低い声音で両部は答えた。

だが、話し相手のことを分かっているのだろう、どこか楽しげで普段より明るい声だった。

「なら話は早い。これから島津組総勢で滋賀洞爺の搜索及び神風穂波・白雪の保護を開始する！」

「はっ！」

「まずは屋敷にいる奴ら全員に事の内容を知らせる！ そして複数に分かれて白水町から外へ出るルートを全て閉鎖するよう通達！」

「承知！」

それだけ言うと両部は老人とは思えないほどの素早さで立ち上が

り、廊下へと出て行った。直ぐに見つかった組の人間には怒声とも思えるような大声で屋敷にいる人間全てを大広間に集めるよう伝えていた。

「聖。北部：清流トンネル方面は羅刹師匠に連絡すればおそらく閉鎖できる。あとは滋賀という男の車らしきものを見つけ次第：五分以内に連絡をする」

『ああ、頼む』

「任せられた！」

電話を切ると、大広間の方が既に騒がしくなっていた。

この様子から察するに、屋敷にいる人間全てが集まったようだ。

両部の仕事の速さには相変わらず感嘆させられる。

「さて…」

座っていた座布団から立ち上がり、部屋の奥へと向かう。

そこには実践用に作られた木刀が二振り置かれている。

そのうちの長い、いわゆる大太刀と呼ばれる部類の方を手取る。刀身およそ四尺（約120cm）。重ね及び身幅は共に厚く、その無骨さは鬼の包丁と呼んでもおかしくないほどだ。当然そんなものを入れられる刀袋など殆ど無いので、仕方なく布を何重にも巻いて何とか刀身を保護している。

柄を手に取り、軽く一つ振ると、その重さが嫌というほど感じられた。

最後に振るったのは二年前。

それ以降は必要性が無くなり、部屋の隅で静かに眠らされていたのだが…

「…ようやく、あいつに恩を返す機会が訪れたぞ…」

語りかける刀から答え等は当然無い。それでも、意志でも持っているのかと勘違いしてしまいそんなほど突然に重いはずの大太刀が軽くなったような気がした。

大太刀を肩に乗せ、急ぎ足で大広間へと向かう。

勢い良く大広間の襖を開くと、両部から話を聞いたであろう屋敷

にいる組の人間が三十人ほど集まっていた。誰も彼もがやる気に満ち溢れており、子供が見れば泣き出してもおかしくないような顔を嬉しそうに歪ませていた。

全員が俺の姿を確認すると、先ほどまで堪えきれずにざわついていたのが嘘のように静まり返った。

…気迫は十分。

全員の視線が集まったのを確認し、静かに口を開く。

「俺の…そしてお前達の…島津組の恩人である神風聖に、恩を返す時が来た」

男達は静かに耳を傾けている。

「もちろん、これで今までの恩全てを返せるとは毛ほども思っていない。今回の件だけで返しきれぬものだとはい底思わない」

「それでも、恩人が困り、その恩人が助けを求めぬのなら、何も言わずに手を差し出すのが島津の流儀。異論は無いな？」

「鬼島津の恐怖、滋賀洞爺に思い知らせてやれ！」

俺の掛け声と共に、その場にいる全員が拳を振り上げ、夜を打ち破らんばかりの鬨の声をあげた。

「予想以上に慌てていたな、神風さんはよお？　しかし、生の叫び声が聞こえなかったのは残念だったな…予想以上に落ち着いていやすかったいな」

「……」

…誘拐殺人犯・滋賀洞爺に捕まり、身動きが出来ない状態にされてからおよそ一時間。突然部屋の窓を破られ、抵抗空しく捕まってしまった。今は猿轡は外されているが、目隠しをされた状態だった。当然、その状態で運ぶわけもなく、しばらく運ばれた事と音、感触からして車に乗せられたと考えるべきだろう。

しかし直ぐには発進せず何故かその場にしばらく停車していた。誘拐犯の話から想像すると、お父さんの悔しがる姿を遠くから見たかったのかもしれない。電話が終わると直ぐに車を発進させ、何

処かへと向かい始めた。

「…お父さんは…そんな風に感情を…露わにする人じゃないからね…」

必死に震える声を抑えながらも、誘拐犯に言い放つ。

当然、何をされるか分からない…いや、この先自分がされること
が大体分かっている分、想像させられることによって生まれる恐怖
によって身体は落ち着きなんて言葉を忘れたかのように震え続けて
いるが、黙らずにはいられなかった。

その言葉が怒りに触れたのだろうか、一瞬どすの利いた声で聞き
返してきたが、何かに納得するような声をあげると、今度は少し愉
快そうな色が声音に含まれた。

「ああ…？ ああ、成程。お前は父親がみつともねえほど荒れたと
ころを見た事がねえのか…！」

「……」

何のことだか分からない、という感情が表に出たのだろうか、誘
拐犯は聞いてもいないのに、昔話を始めた。

「あいつが最初に俺を見つけたときの話だが、その時の俺はその前
に殺したガキの左手を持っていったんだよ。二人分だ。殺した証明と
して一人ずつ切り取っていくつもりだったんだがなあ…」

まるで食玩を集めるかのような気軽さで、殺した子供の腕を集め
ようとしたことを話す誘拐犯に、恐怖を感じざるにはいられなかつ
た。この男にとって殺人は大した事ではない…むしろ誇るべきこと
だと思っているようだ。

そんなこちらの戦慄など気にする様子は一切無く、誘拐犯は少し声
の調子を落として話し続けた。

「それを持っているところをあいつに見つけられちゃったんだが…
それをみた時のあいつは…そうだな…」

最適な言葉が見当たaranかったのか、誘拐犯はしばらく黙り込ん
だが、良い言葉が浮かび上がらず断念したようで「ちっ…まあいい
…」と吐き捨てるとうとう言った。

「恐怖と怒りに狂った…ってところだったな」

…それはあまりにも予想外だった。

三日間…それだけの短い期間でありながらも、お父さんが感情をあまり表に出さないことは嫌というほど分かった。だからこそ、怒りを露わにするお父さんの話は信じ切れなかったし、想像もできなかった。

「あの時はさすがの俺もびびったぜ…ナイフを持った俺に対して狂ったような声をあげながら殴りかかるわ、切りつけて血が出ても全く怯む様子がねえわ…しかし、見知らぬ他人のガキの為に泣いていたから、今回自分の娘が殺されるのを知れば、もっと狂ってくれると思っただのよ…」

心底残念そうに、誘拐犯は呟く。

「まあ、それも娘の断末魔を聞けば…って、何だ？　ここは通れたはずじゃ…？」

急に車の速度が遅くなり、危うく席から転げ落ちそうになったのを何とか堪える。横にされているので、シートを破れそうなほど強く握ってようやく堪え切れた。

「ちっ…急に工事なんか始めやがって…！　これじゃああそこまで行くのに時間がかかるじゃねえか…」

苛立ちを隠そうともせずクラクションを殴ったようで、車体を揺らしながら短く甲高い音をたてたが、それで道が開くわけでもなく、誘拐犯は渋々ながら車の向きを百八十度変えた。

「畜生、他の道は…」

そんな事を小さく呟きながらも、他の道を探そうとしている。だが、その後も身体の揺れ具合から何度も道が閉ざされている為に方向を変えているようだ。

しばらく車に揺らされ続けたが、目的地につく様子は全く無く、見えない状態でも誘拐犯が怒りを露わにし始めたのは明確だった。そして突然運転を中止し、怒りをぶちまける様に舌打ちをした。

「…どこにも…どこからも抜け出せねえ…」

忙しくなくハンドルを拳で叩き、何かを考えているようにぶつぶつと呟いていた。

すると突然車体が大きく揺れた。

「な…なんだ!？」

誘拐犯は相当焦ったのだろう、ドアを勢い良く開けて外に出たよ
うで、砂利を踏むような音が聞こえた。

衝撃で目隠しが外れて、ようやく視界を取り戻せた。

辺りを見てみると、砂利の敷き詰められた公園がまず見えた。

そして車のライトが照らし出す先には…

「…お父さん…?」

視界が戻ったばかりなので、あまりの明るさにはつきりとは見え
ないが…

特徴的な白い髪。

影でも分かる長身。

そして、未来で見た…お父さんの遺品…

手甲

拳と腕を覆う造りで、この時代に来る前に、一度持ったときはあ
まりの重さに持ち上げることが出来なかったものだ。

そしてお父さんはその拳で車のボンネットを打ち抜いていた。

見事正確にエンジン付近を打ち抜いたのだろう、拳を引き抜いた
場所からは黒い煙が上がり始めた。

「なっ…神風デメエ一体どうやって俺の居場所を…!」

「無事か? 穂波、白雪」

お父さんは誘拐犯が喚くのを一切無視して急いで私を車から降ろ
し、誘拐犯から距離をとった。

その行動は見事としか言うべき言葉が見つからないほど迅速だっ
た。

その距離は大体二十メートル。走って近づいても直ぐに対応でき
る距離だった。

「穂波ちゃん、白雪ちゃん、大丈夫!？」

「怪我はありませんか！」

「滋賀洞爺包囲！ 逃げ道を塞げ！」

安全な距離をとると待つていたのだろう、お母さん、雪華さん、義孝さんの声が聞こえた。お母さん達はとても心配そうに駆け寄ってきて、義孝さんは草陰に隠れていた男の人たちに何かと命令を掛けていた。

そしてお母さん達が私を介抱するのを見ると、お父さんは立ち上がって誘拐犯と対峙した。

その威圧感に恐れを覚えたのか、誘拐犯：「滋賀は余裕でも怒りでもなく、怯えに近い表情をしていた。」

「…滋賀洞爺…」

「…なんだ！」

余程余裕が無いのだろう、滋賀は懐に隠していたナイフを取り出し、震えながらお父さんに向けて吼えた。

しかしその行動に一切反応する事無く、お父さんは口を開いた。

「…この場所が…なんという名前かは…知っているか？」

「…は、はあ?! 知るか、そんなもん！」

「柴咲霊園：お前の殺した子供たちが眠っている墓のある場所だ。」

「ここは駐車場だがな…」

静かにお父さんは口を開き、そう言った。

ゆっくりと手をあげ、駐車場にポツンとある小さな石の階段を指差した。

「…その石階段を昇り、三段目：四つ目の墓が、お前が奪った命の墓だ」

「…何が言いたいんだ、ああ?!」

突然に墓の場所を伝え始めたお父さんの意思を読み取れず、滋賀は堪えきれずに激高したが、それに対してお父さんはいつも通り、冷静だった。

「…悪かった、単刀直入に言おう。あの少年少女の前でお前の悪行を詫びて来い」

そう言ってお父さんは静かに手を下げた。

その手は何かを抑えるように震えていた。

「…は、はあ！？ ふざけるなよ？ 俺が謝る？ 馬鹿言え、殺した相手に謝るなんて意味のない事をさせるんじゃないやねえよ！ …ほら、良いから道を開ける！ 切り殺されてえのか！」

滋賀は聞く耳を持たないようで、お父さんとの間合いがかなりあるにも関わらず、無茶苦茶にナイフを振るっていた。威嚇のつもりだろうが、お父さんはそれに対して何の反応もしなかった。

…いや、滋賀がナイフを振り回し終わり、呼吸が荒くなりはじめ、少しずつ歩み寄っていった。

「…もう一度言う。これが、最後のチャンスだ。あの子達に、詫びて来い」

先ほどとは異なり、低く、重い声だった。

背中後ろにいる私でも、怖いと感じた。

そしてそれは周りにお母さん達も同じだったようで、「うっ！」という小さな悲鳴を上げていた。義孝さんだけは一人落ち着いた様子だった。

真正面からその言葉を受けている滋賀は、比べ物にならないほどの恐怖を感じているのかもしれない。

一步、また一步とお父さんは滋賀との距離を詰めていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1210w/>

Hello,New World!

2011年10月1日18時50分発行